

ドナウ通信

No. 56

目次

随筆	ルーマニア紀行 - 世界文化遺産を訪ねて	佐藤 美都子	2
	ご縁	久新 秀子	7
	走って良かった	藤田 剛宏	9
	マラソン・リレーに挑む	盛田 常夫	13
補習校児童作文			18
	谷中 里沙 / あきざわけんじ / 栗田 和征 / 横山 聡美		
	エルドシュ・バルナバシュ / せざきみきと / 清水 陽介		
	藺部 健 / 太田 祥子 / 横山 ゆか / 清水 郁馬 / 手嶋 慎平		
報告	「補習校の現状と将来のあり方」		
	補習校運営委員会幹事 山崎 利樹・上坂 彰		25
編集室より			27
	日本人会事務所移転のお知らせ 事務局便り		
ソフトボール・ソフトバレー大会報告			29
	ソフトバレーボールに参加して	堀部ゆかり	
	ソフトボール優勝への軌跡	石崎 成則	
番組「ミツコ」にたいする日本人会の対応			31
資料	日本人会声明、抗議文、要請書ほか		34
会社紹介	Maxell Hungary	高畑 光博	44



随筆

ルーマニア紀行

世界文化遺産を訪ねて

佐藤 美都子

五月下旬心地よい旅行日和のなか、私たち家族はルーマニアに向けて出発しました。この旅行の狙いは、ルーマニア中央以北に点在する世界文化遺産です。マラムレシュ地方の古い木の教会、モルダヴィア地方の修道院、シギシヨアラ町歴史地区、そして中世の要塞教会を五泊六日かけて廻る計画でした。

マラムレシュ

ブカレストの北北西、トランシルヴァニアの北部、ウクライナと国境を分かつ辺境の地がマラムレシュです。ここには十四世紀から十五世紀にかけて建てられた古い木の教会が、点在する村々に残っ

ています。それらのうちシュルデシテイ、ブルサナ、イエウドウ、プロピシ、ロゴス、ブデシテイ、デセシテイ、ポイエニレイゼイの八つの村にある教会が世界文化遺産として登録されています。

ハンガリー東端の街ニレジハーザからルーマニアのサツマレに入り、マラムレシュの中心都市バイアマールには昼下がりに着きました。私たちはそこから一番近いシュルデシテイ村を皮切りに木の教会巡りを始めたのですが、ほどなくこの教会巡りには思いもかけぬ困難が立ちほだかつている事に気づきます。

緑に染まるなだらかな丘陵地帯の斜面から、木々や家々の屋根をすり抜けてすつくと屹立する教会の塔。一目でそれとわかる美しさで思わず歓声。が、さてどの様にそこまで辿り着けばよいのか皆目分らないのです。天に向けて伸びる教会の塔は遠くからは苦もなく見えますが、近づくと手前にある家々に遮られて視界から消えてしまいます。しかし手助けとなる標識はなにもありません。「確かこ

ちらの方に見えていたからこの道を曲がれば」と車を進めると袋小路。バックで引き返し、「ではこちらの道なら」と別の道を行くとその道は思わぬ方角に迂回し、ついには村の外へ。「この川のすぐ向こうに見えるのだから、川沿いの道を進めばきつと橋があつてそこから向こう岸へ」と試してみるのですが、行けども行けども橋はなく、ついにはけもの道となつて山の奥へ、といった按配なのです。

「観光客にはよほど来てもらいたくないようだね」と夫が苦笑し、「マラムレシュには一日半しかいられないのに」と私はいらいらし、後ろの座席で息子が「ブダペストに帰りたい」と呟き始めます。

私たちは二日間で、マラムレシュの木の教会の代表ともいえる一番古く最も高いシュルデシテイ教会をはじめ、世界文化遺産に指定されていない物も含め九つの教会を訪れました。そのどれもが大小、高低の差こそあれ、ほぼ直方体の木の箱の上に、高い物では数十メートルにも達する塔が載っている、この地方独特の建

築様式をしつかりと守っていました。

その天に向けて一途に伸びる塔の部分に、私は何よりも心惹かれました。薄く小さな木片を微細に重ね合わせ積み上げることでも生み出される、波打つ布のごとく優美な曲線と、圧倒的な高さにもかかわらず軽々と天に伸びる飛翔感。その構造美はカルパチア山脈に緩やかに起伏し、続く丘陵のなかに、距離を置いて眺めた時いつそう美しさを増し、神が地の民のため天から降りたつに誠にふさわしい場と、私の目には映りました。

モルダヴィア

三日目、私たちはルーマニア中央を「つ」の字に走るカルパチア山脈を越え、ルーマニア最北東の地モルダヴィア地方にやって来ました。一九九三年から世界文化遺産に登録されたモルダヴィアの七つの修道院を訪れるためです。

一四世紀から一六世紀にかけてモルダヴィア地方は、モルダヴィア公国という独立した一国でした。モルダヴィア公国

は歴代名君の治世下でルーマニア中世文化の華を咲かせ、一六世紀初頭には輝く黄金期を迎えていました。この時代は、ハンガリーとトランシルヴァニアを支配下においたオスマン軍が、急激にその領土を拡大していた時期でもあります。

一五世紀から一六世紀にかけてモルダヴィアの君主達は、オスマントルコとの戦いに勝利するたびに神に感謝し、人里はなれた山奥に修道院や教会をこぞって建てました。ルーマニア正教の庇護と民衆の啓蒙に努めたのです。そうした修道院や教会では、文字を理解しない民衆のために、キリストの教えや聖書の場面、古くからこの地方に伝わる昔話やオスマントルコとの戦いの模様などが、壁面に鮮やかに描かれています。

スチャバ周辺のブコヴィナ地方（北モルダヴィア）には、フレスコ画が内壁だけにとどまらず、外壁の隅々にまで及んでいる修道院が五つあります。古い順に、ヴォロネッツ、アルボーレ、フモール、モルドヴィッツァ、スチエヴィッツァで

「ブコヴィナの五つの修道院」と呼ばれ、ルーマニア観光の最大の見所となっています。

これらの修道院は大小の差こそあれみな同じ形をしていて、外壁フレスコ画のモチーフも共通です。長方形の短い一辺にあたる東壁が外側へ弧を描いて張り出していて、その部分に祭壇がしつらえてあります。相対する西面が入り口で、入り口の外壁には必ず「最後の審判」の壮麗な場面が描かれています。中でもヴォロネッツ修道院の「最後の審判」は、壁面から溢れ出さんばかりに描かれた絵のその細部にいたるまで、ほぼ完璧な形で残っていて見事です。面白いことに、祝福され天に召されるのはみなモルダヴィア人、裁きを受けて地獄へ落ちる悪者はみなトルコ人の顔をしています。小さな人物の顔一つにも当時の権力体制が反映されていて、なるほど、と思います。

ヴォロネッツ修道院の壁画を特徴づける青色は、この壁画が何世紀もの間風雨にさらされてきたとはとても思えないほ

ど深く曇りがありません。たとえキリスト教徒でなくても、そのフレスコ画の前に立てば、当時の人々のひたむきな信仰心に心洗われる思いがするでしょう。

東壁面には聖母子を中心として聖人や天使達が並んで描かれ、南壁面には「エツサイの樹」と呼ばれるダビデの父エツサイに始まるキリストの系譜をみいだせます。壁面最下部にはエツサイが、どういふ訳か必ず眠っています。そこから上方中央に描かれている十字架上のキリストにいたるまでの系譜が、全体で樹木を形作っています。エツサイが眠っているので、示された系譜は実はすべてエツサイの夢の中のことのようにも、私には受け取れました。

何世紀にもわたって風雨に真つ向から洗われてきた北壁面は、どの修道院でも保存状態が悪く、ほとんど何が描かれているのか判別できません。ただ、一番最後に完成したスチエヴィツァ修道院だけに、「天国の梯子」と呼ばれるフレスコ画が、北壁面一面に鮮やかに残っています。

す。天国に至る三十二段の梯子を、悪魔の誘惑と闘いながら大勢の修道士が登っています。梯子を踏み外しそうな修道士もいれば、誘惑に負けまっさかさまに転落している修道士もいます。下では悪魔が待ち構えているのです。天国からは大勢の天使が舞い降りてきて、登り続ける修道士をやいのやいのと応援しています。

「漫画にもこういうシチュエーション、よくあるよね」。傍らで写真を撮っていた一四歳の息子が、とっぴな意見を述べます。「漫画？なんと不謹慎な！」と思っただけれど、言われてみれば私も思い当たります。梯子を登っているのはスーパーマン。それを悪者達が追って登るのですが、次々と蹴落とされます。善良な市民や警察が見守るなかスーパーマンは梯子を登りつめ、死に直面している弱者をすんでのところで救います。われるような拍手と祝福。まさに天国です。

そこで、はたと思いました。ひよつとしたら当時の人々は、この壁画を私たちがイラストや漫画を楽しむように見てい

たのかもしれない。トルコ人だのモルダヴィア人だの天国だの地獄だのと、わいわい騒ぎながら。テレビも映画も知らない人々にとって、巨大な極彩色コマ割漫画のようなこのフレスコ画は、衝撃的なヴィジュアル体験だったかもしれません。興奮して食い入る様に見える当時の人々を想像すると、口元がほころびます。

旅に出る前から、ブコヴィナの修道院は美しいカラー写真で何度も見ていました。しかしそれを実際に我が目にした時、極めてありきたりな言い方ですが、その類稀な美しさに息を呑みました。人は信仰というもののため人殺しもすれば、このように美しいものを作り出します。人を地獄にも天国にも導き得る宗教とは、何と得体の知れないものでしょう。

フモール修道院を描いた宮廷画家トーマ以外は、名もなき無名の画家達によって描かれたこれらのフレスコ画。そもそもは文字の読めない民に、キリストの教えを語りかけるためでした。数世紀をへた現代に生きる私たちには、宗教という

棹を遥かに越えて、人間の成し遂げた偉業を目の当たりにした深い感銘をもたらしてくれると、私は思います。

私たちはブコヴィナの五つの修道院と内壁のみにフレスコ画の描かれている他の五つの修道院を二日かけて廻り、その後今回の旅の最後の拠点であるトランシルヴァニア地方のシギシヨアラへ向かいました。

シギシヨアラ

シギシヨアラはブカレストの北西約三百キロ米、トウルナベ・マーレ川沿い、標高四一二米にあります。現在は人口三万四千人余りの小さな町ですが、中世にはトランシルヴァニアの中心として栄えた城塞都市でした。城壁に囲まれた旧市街には、中世の城下町の佇まいが当時の規模のままに残ることから、歴史地区として世界文化遺産に登録されています。

旧市街への入り口は時計塔のある城門の一つです。定時になるとからくり人形が顔を出すこの時計塔は、プラハの時計

塔と同じ時計職人が作ったそうです。そう云われてみると確かに、プラハの旧市庁舎の塔の時計によく似ています。

時計塔のてっぺんからは、城壁で囲まれた旧市街が一望できます。小高い丘の起伏に沿って立体的に広がる旧市街では、元気のよい木々の緑が我も我もと顔を出し、その中を三角や四角の赤い民家の屋根が、手を取り肩を並べて行列しています。私はしばし時を忘れて見とれました。

時計台を降りると「ドラキュラの生家」と銘された家がありました。そう云えばルーマニアは、ドラキュラの故郷です。その「生家」とやりに、息子が並々ならぬ興味を示しましたが、残念ながら非公開だったようです。

シギシヨアラは歴史地区のみならず、近郊にある「要塞教会」も必見です。世界文化遺産に指定されている一三世紀から一六世紀にかけて建てられたトランシルヴァニアの要塞教会です。代表的なものはピエルタンですが、その他に六箇所あります。私たちはシギシヨアラ近郊に

位置するヴィスクリ、サスキズ、ピエルタン、ヴァレア・ヴィイロルの四箇所を訪れました。

要塞教会と呼ばれる由縁は、当時猛威を振るっていたオスマン朝の襲撃に備え、周囲が分厚く高い防壁で囲まれているからです。高台に建てられているうえに必ず高い塔を持つ教会は、外敵の侵入をいち早くキャッチする格好の見張り台でもありました。確かに塔に登って眺めてみると、教会の周りに肩を寄せ合って建つ数十件の農家が途切れたその向こうには、緑に染まるなだらかな野山がついに空に交わるまで、視界を遮るものは何一つありません。三六度のパノラマでした。

訪れた教会にはすべて、その簡素な様式には不似合いなほど美しく堂々たるパイプオルガンが備えられていました。キリスト教と西洋音楽との深い繋がりを、こんなところでも見せつけられる思いでした。東ヨーロッパの片田舎にあるこんな古ぼけた教会にも、日本にはいつたい何台あるだろうかと思われるほど立派な

パイプオルガンが、何世紀にもわたって置かれているのです。日常の風景のこのまのように。音楽家である私は、少なからず嫉妬にさいなまれます。

素朴な人々

この要塞教会を最後に、私たちの第一回ルーマニア旅行は幕を閉じました。知る人ぞ知る世界文化遺産の宝庫であるルーマニアは、継承すべき貴重な文化を発見する驚き、それを知る喜び、そしてそれに触れる感動を与えてくれました。のみならず、現代人が失ってしまった伝統の中で生きる簡素な生活、素朴な心情をも、我々に教えてくれたのです。

テレビもゲームセンターもないマラムレシュの小さな村々では、民族衣装を着て日曜ミサに出たあと女は老いも若きも日なが、通りに並ぶベンチに腰掛けておしゃべりしながら時を過ごします。それが彼女達の唯一かつ最高の社交場なのです。うら若き娘達はちよつと「白鳥の湖」の有名なバレエ「四羽の白鳥」よろしく、

手に手を交差し肩を並べてゆつくりと村のメイン・ストリートを歩きます。そうして若い男性に見初めてもらおうというのです。何と可憐で純情な乙女心でしょう。泊まった民宿ではお母さんやおばあちゃん、自慢の手料理で精一杯歓待してくれました。中でも絶品はロールキャベツ。お腹をすかせた息子が思わず「お、餃子！」と口走ったほど、それは餃子にそっくりでした。透き通るほど薄いキャベツに巻かれたミニ餃子が、数個寄り添ってお皿に並んでいます。口に含むと、とろけるようなお肉からまるやかなスープが口中に広がって、餃子にも勝るおいしき。感激した私たちは、何度もお代わりをしたのです。忘れ得ぬ思い出いっぱいの素晴らしい旅行でした。

しかし私はこれだけで、ルーマニアの事を語り終わる訳にはいきません。ルーマニアが想像以上に貧困な国であったという事。貧困に喘ぎ、苦しみ、疲れきった人々の姿に激しく胸を衝かれたという事。どうしても述べておかなくて

はなりません。田畑でも村々でも働く人々を助けて大活躍なのは、機械でも車でもなく馬や牛でした。トラクターは数えるほどしか見なかったし、村と村を結ぶ公共の交通機関は皆無でした。衣類を抱えて川へ洗濯に行く女の人にも、バックを持って井戸へ水を汲みに行く少女にも会いました。ジブシーの生活環境は、これでよく幼い子供が生き延びられると目を疑うほど劣悪でした。おまけにハンガリーより遥かに多いのです。私たちは車から降りるとたちまち物乞いの子供達に、人里離れた修道院を出ると今度は大人達に取り囲まれました。

二十数年前はさほど差がなかった人が言うハンガリーとルーマニア。隣国でありながらここまで開いてしまった生活の差に、一体何が原因なのだろうかと悲観する暗い思いと、ルーマニアもいつかきっとハンガリーの様に、豊かな東欧の国になるに違いないという信頼に満ちた明るい思いとが、旅の間、私の中で交錯していました。

一 縁

久新 秀子

当国に赴任するのに春から夏にかけての時季と、秋から冬にかけての時季では「全く印象が違う」と書かれたのを読んだ事があります。確かに季節による差は大きい。

私達が着いたのは冬も冬、一月十五日。ヴァツイ通りに人影は無くどこかのビルの電光掲示板にマイナス5 と出ていた。初めて見るドナウは泥の河。これがあの「美しき碧きドナウ」？淀川の方がよっぽどキレイヨ！と言うのが私の印象でした。

任地の *Dunajváros* は曇天に覆われた大平原をドナウに沿って南下すること約八十キロメートル。挨拶に伺った学長室で日本留学の経験のあるキッシュ先生は、「何もありませんねえ」、と流暢な日本語で繰り返しておっしゃられる。春になれば花が

咲いて実が生って……。しかし何も無いのは花ばかりではありません。ソ連時代に製鉄の町として作られたこの町にはたった一軒あるホテルにエレベーターもない！？。もちろん外国人用の住宅などありません。日本人が来る事になったので急遽、平屋の家に増築した百平方メートル程の二階部分が我が家となりました（階下には六十四歳のヨリーさんが一人住まい。七十三歳歳のご主人は農場の方において時々来られている様子）。

百平方メートルは夫婦二人の生活には十分な広さではあるが……。家具調度品の何と古いこと！電機製品に至ってはお話にならない。ビツシリ綿帽子のように付いた冷蔵庫の霜取りに扇風機（後に自分で買った物）をかけて解かした時は、とても情けなく、思わず「日本には三十年前だってもっといいのが有ったわよ！」と主人に八つ当たりしたもの

です。掃除機然り、一事が万事。タイマーも温度計も無いガスオーブン。引き出しの無い机。独楽の付かない椅子。茶色一色の食器等々。言葉は通じず、天気は悪く。あーあ。



でも壁には明るい花の油絵が。部屋のあちこちには素敵なドライフラワーや観葉植物が。そしてキッチンにはパプリカの粉や芥子の実が国旗色のリボンで飾られて「ようこそいらっしゃいました」とでも言う様に置かれているのでした。後のなつて古い冷蔵庫は、我が家ばかりでは無いと知りました。知人も霜取りには苦労したようで、つい金具を使って壊してしまい。「ボチャナット」と謝ったら、「又同じ中古品を用意してくれた」、と言って笑っていました。タイマーの無いガスオーブンはヨリーさんも同じでした。

或る日、彼女は私達日本女性に料理講習会をしてくれました。バブレヴェシユ、パプリカチキン、シユートメニー（私達はパンと呼んでいるが）。醗酵させた生地に棒ジャム？を入れて、細長い型にしてこのオーブンで焼くのです。この時初め

て、何も無い我が家と同じである事に気付きました。道具は使い用です。何度も使っているうちに“癖”がわかって使える様になるものです。この時のパプリカチキンとパンは日本人の間でその後しばしば作られる事となりました。其々の家庭の味付けで。因みに私の好きなのは棒ジヤムの替わりに、ラム酒に漬けた干しサクランボを入れるのです。乾燥したサクランボなんて日本で入手できるのかしら。

料理好きなヨリーさんは、私が作るハンガリー風石狩鍋（単に鮭が入っただけですが）をとて喜んでくれます。これは鮭に塩をして冷凍しておき、後日鶏肉、豆腐、きのこ、葱、白菜を昆布出汁と醤油味でお鍋にしたものです。農婦であるヨリーさんはこの白菜が気に入ったようで、この冬、種を買って来て見せてくれました。春になったら蒔くのだと。そして私が一時帰国から戻

った五月初め、玉葱やトマトの植わった庭に 花の咲いた白菜が一株。私に見せる為残してくれていたのでした。今回は失敗作でしたが研究熱心なヨリーさんの事だから 次はきつとスーパーに並んでいる様な立派なのを作ってくれるでしょう。

見る程の教会も博物館も何も無いドナウイヴァーロシユ。「住めば都」とはとても言い難い処ですがこんな氣の良いハンガリー人と一つ屋根の下で暮らすのも 何かのご縁。冷蔵庫の霜はこまめに拭き取る事にしました。



走って良かった

藤田 剛宏

この異国の地で自分の人生はこれから果たしてどうなってしまうのだろうか。「ハンガリー・ジャーナル」誌の「ちらし」で駅伝メンバー募集の案内を見たのは、そんな事を考えていた時だった。学生時代にも走る事が苦手だった私だが、何となくその案内に応募してしまった。自分にも出来るのだという事を証明してみせたかった。ところが、「既にメンバーは揃っているから、補欠として登録する」との事。少々落胆した。

大会一週間前になって、「大会を見学しないか」というメールが届く。続いて、「参加予定メンバーの茂木さんが練習不足の様なので、代わりに参加しないか」という誘いのメール。補欠登録と言われた時の無念さも手伝って、是非やらせて欲しいと

返答。

その日から早速、本格的にトレーニングを開始する。まずは車で七キロという距離を実測。あれ、結構あるんだなという印象。家に戻り、トレーニングウェアに着替え、早速走り始めるも、三キロで足が上がらなくなってしまう。タイムは一八分そこそこ。こんな筈では、と暫く休んでから、再度走ってみるも、タイムは縮まらない。まあ、初日だからと次の日に期待をかける。しかし翌日はひどい筋肉痛と、その隣り合わせの筋が切れる様に痛い。筋肉痛を治すには、もつと練習を積む事が最良と何かで読んだのを思い出し、痛みを堪えて走ってみる。しかし、その日は三キロも走りきれない。とにかく本番では七キロを走り続けるのだと思い、歩きも含めて七キロという距離を改めて体験してみる。然し、筋の痛みが強烈で、歩くのさえもびっこをひく感じになってしまう。

盛田監督からメールが届き、マルギット島で一緒に走ってみようという誘い。本番でがっかりして貰わない為にも行ってみようと、張り切りすぎて、集合時間の二時間も前に到着してしまった。茂木さんも来る予定だ。前日にアシックスのシューズを買ったが、道が濡れているので、この新しいシューズは温存し、古いシューズを履いていた。「それはラニング用ではないだろう」と盛田監督に指摘され、渋々、車に大切にしまっておいたこのお「ニュー」のシューズに履きかえて、三人で走り始める。走る順序は盛田監督、茂木さん、そして私という順番。マルギット島ではジョギングを楽しむ人が沢山いたが、私たちは誰にも追い越される事無く走る。コースは大体五キロとの事だったが、最後の一キロ位から遅れ始めてしまう。何とか走り切ったものの、やはり駄目なのかと改めて落胆をする。

言われていたのは、三キロ―二分の走力を目標にという事なので、やはり自分には無理なのかと負けを認め、翌日茂木さんに相談し、彼に出場を譲ることにした。茂木さんが了解してくれたが、今度は逆にこんな事で良いのかと思い直すはめになった。

「走るか、走らないか」。自分の迷いを吹っ切るために、その夜、子供達に相談をした。「パパ、頑張つて。負けないで。応援するよ」。私にとつて、この子達は私の本当の生き甲斐で、宝以上の存在だ。こう言われれば、やるしか無い。面目ないことだが、茂木さんに「再度走らせて欲しい」とお願いする。茂木さんは文句も言わず、私の我が儘をとがめることもなく、またもや快諾してくれる。これには心から感謝した。茂木さんの優しさに応える為にも、本番ではとにかく距離がある限り走り続ける事を心に刻み込む。本番まではあと

二日。とにかく毎日七キロという距離を身体に刻み込む。

いよいよ本番の日が来た。睡眠不足にはなるまいと、夜は早めに寝たので、調子が良い。早朝の清々しい空気の中で、飼い犬のビーグル犬のバイノクとチツピーと一緒に七キロを歩いてみる。歩いているだけなのに、何か心が高揚してくる自分を感じる。家に戻りシャワーを浴びているところで子供達が起きだしてくる。集合時間には少し早めだが、出発する。当然、子供達も一緒だ。妻は残念ながら、仕事が立込んでいるというので、家での留守番を頼む。出発前に、メガホンを持って行くという長女に、そこまでしなくてもと止めるのに、大変だった。

休憩所としてアレンジしてもらった日本人会事務所に入る。ハンガリー人サポーターや他の参加者が既に集まっている。子供連れは私だけの様で、恐縮して部屋の隅で子供達に

持参したお菓子を食べるのを許す。子供たちは、本当はこれが目的だった様だ。第一ランナーのアツティラが七キロ完走を三〇分と想定し、各キロ毎の目標タイムをメモにしていた。それを書き写させて貰う。二番ランナーのペティは生後数カ月の可愛い赤ちゃんを連れて入ってくる。私の前の三番ランナーのジョルトとは、お互いに顔を良く見合せて覚え合う。ハンガリー人の彼には日本人を見つけるのは簡単だろうが、私がかつたばかりのハンガリー人を見分けるのはちょっと難しい。五番ランナーの恒平君と会うのは久々だ。覚えていたのだろうかと思つて声を掛けると、ちゃんとソルノクで会つたのを覚えていてくれた。アンカーの盛田監督は、着ているランニングパンツからして違う。ハンガリー人サポーターの女性も色々声を掛けてくれる。会つて数分なのに、何か長年来の友人の様な親しみを感じる。そ



んな中、盛田監督が、「若し良ければ自分のシューズを履いて走ってみたら」と、青いシューズを差し出してくれる。底の厚さも丁度良く、履き心地が素晴らしい。それよりも感じ入ったのは、実はお「ニュー」のシューズのサイズがちょっとだけ大きいのをマルギット島と一緒に走った時に気づいていたようで、それを見越して持ってきて頂いた様だ。ここまでして貰って、私が足を引く張っ

てしまう事だけは避けなければ。

茂木さんも来てくれている。彼も走りたそうだ。本当に悪い事をしたと後悔の念を感じると共に、彼が譲ってくれた事に心からの感謝を感じる。友人の郵船航空の田端夫妻も到着した。この夫妻は何時見ても恋人同士の様で、本当に羨ましい。田端夫妻も何れは子供を持たれるのだろう。余計なおせっかいだと思いがながら、今日は子供達の面倒を見て頂く様にお願いをする。

自分自身の準備を開始する。然しストレッチ運動を幾ら繰り返しても、まだ十分と思いきれない。一時のスタートの時間が近づいてきた。既にアッティラは事務所から出た様だが、追いかけて皆でスタート地点に行ってみる。凄い人並みだ。何チーム参加しているのかと聞くと、大体九〇〇チームだとの事。ただ東洋人のチームは我々だけの様だ。スタートして二〇分位経った所で、もう一

番の走者が帰ってきているチームがある。どういう心肺機能を持っているのだろうかと思いがちにも、腿上げ運動を繰り返す。アッティラが帰ってきた。スタートしてから三〇分。皆、速い。これでは意気消沈してしまうので事務所へ戻る。そこで子供達の面倒を改めて田端夫妻にお願いをし、改めてスタート地点へ戻る。

既に三番ランナーのジョルトはスタートしている。チームアシスタントの浅野未希さんがつけている記録表を見ると、アッティラは三〇分三三秒、ペティは三二分丁度とある。何時ジョルトが帰ってくるのかと心待ちにしながら待つ。

スタートしてから一時間二〇分位して田端夫妻が子供達を連れてやってくる。長女のありすから、改めて「パパ頑張れ」の一言。ところがそんな時、急に横腹に痛みを感じる。大丈夫かと心配になるが、今更そんな事は言っていられない。ジョルト

の姿が見えてきた。我ながら、本当に大声を出して、ジョルトからバトンを受け取る。走り始めたら、横腹の痛みなどは忘れてしまっていた。きつと緊張からの腹痛だったのだらう。スタートして二〇〇米位走って、ストップウォッチを入れていないのに気付く。慌てていて、どうも自分のペースが速すぎる様だ。まずは落ちつかなくては。一キロの地点でストップウォッチをセットする。二キロ地点の計測で、この一キロが四分二〇秒。このペースは悪くない。こうなると余裕が生まれてくる。

次の三キロ地点の計測が楽しみだ。しかし、あまりタイムに囚われすぎて、自分のペースを崩す事だけは避けなければならぬ。ちよつと早すぎるペースを落として、比較的楽なペースで走り続ける。そんな中、並走しているハンガリー人女性と会話も楽しむ。

五キロ地点の通過が二五分。この

女性との会話を楽しみ過ぎた様で、ちよつと遅れ気味だ。子供達がゴールで待っていてくれる事を想像する。まだまだ自分に余裕はある。よし、ちよつと早いペースをアップさせよう。ここまで来れば、とにかく七キロは絶対走りきれぬ。七キロの地点で燃え尽きていたい。

六キロ地点で盛田監督が見守ってくれている。「良いペース！」と声が掛かる。それを聞いたなら、もうペースなどに構っていらぬ。倒れるまで走り通すだけだ。ゴールのスタート地点が近づいてきた。沢山の人で、次走者の恒平君が見当たらない。また大声で「こうへー！」と叫ぶと、ウェイティング・ゾーンから飛び出してきた。バトンタッチ。終わった。自分が何分で走れたのかなど考えずに、とにかく子供達を探す。そこをハンガリー人のサポーターが写真をパチリ。タイムは三三分四〇秒だった。ノルマは果たされた様だ。



思い起こすと、この七キロを走り通すまで沢山の人の温かみに触れる事が出来た。自分にとって奇跡とも言えるこのタイムも、自分一人の力だと思っていない。そしてそれが今の私の励みになっている。秋の大会にも絶対出場して、今度は本当に三分を切ろうと考えている。そしてその時には、また新たな人との交流もあるのだろう。但し、その前にタバコを本当に止めなくては…。

マラソン・リレーに挑む

盛田 常夫

とくに理由があった訳ではない。ただ、何となく、走って見たいと思つた。三年前までは、日本人会運動会に八〇〇米走の種目があつて、年に一回、これを走るのを目標にしていた。中学時代に腰を痛める前まで、中距離を走っていたというただそれだけのことなのだが、この歳になつてどれほどのタイムで走れるものか、積み重ねる歳と競い合うという意味があつた。これを目標に、マルギツト島を走つたり、ヘリア・ホテルのフィットネス・クラブでランニング・マシーンを走つたり、プールで泳いだりしていた。

一九九九年には二分二〇秒で八〇〇米を走る会心のレースができ、これならマスターズ陸上に出ても良いのではないかなど思つたりしたが、

競技会に出るためにはそれなりのトレーニングが必要で、私生活をかなり犠牲にしなければならぬから、そのアイディアはすぐに蒸発してしまつた。ライバルだった秋山忍さんから、その秋のロードレースに出ないかと誘われたが、長距離の練習をしていないし、膝と腰に古傷を抱えているので、ロードに出る意思も意欲もなかつた。

最近では、ランニング・マシーン上のことだが、ウォームアップで三キロとか四キロの距離を走っているから、五キロ程度なら走ってみても良いと思つた。たまたま、経済誌 *HYG* で、*K&H* 銀行が主催する「オリンピック・マラソン・リレー」という大会があり、それも今年で一〇回を数えるという宣伝記事が目にとまつた。一人七キロで、六名が一チームを構成する。準備時間は三週間しかないが、出るだけ出てみようかという気になつた。

チームを組む

とにかく六名を集めなければならぬ。幸い、わが社には定期的にジョギングをしている若い技術者がいる。以前にはよくジョギングの話は出ていたが、再度、各自に確認したところ、実際に七キロを走れそうなのは二名だけ。知人の甥っ子で、ジョギングをしている工科大学学生が一人いる。中距離では足の速い恒平を、有無を言わず数に入れても、もう一人足りない。そこで、茂木さんに募集のお知らせを出してもらつたが、茂木さん自身が「自分でます」と自己申告されたので、ともかく六名は揃つた。

「ハンガリー・ジャーナル」の号外が出たところで、藤田さんから出場希望の連絡があつた。補欠に回つてもらつたことを了承してもらつたが、週に二、三度、長距離を走っていると。茂木さんに再確認したら、「今回は参加することに意義があり、無

理すると歩くことになる」という。
「それは困るから、日頃から走っている藤田さんと代わって欲しい」と選手交代をお願いした。

まず、目標だが、広告記事によると、例年八〇〇チームも参加するらしい。多分、三時間を切れれば、一〇〇位以内に入れるだろうと考えた。そのためには、一人七キロを三〇分以内で走ることが条件になる。しかし、この程度のスピード（毎時一四キロ）でも、普段から走り込んでいないと無理だ。高い目標は三〇分だが、無理せずに三五分（一キロ五分、一〇〇米三〇秒）のペースは最低守って欲しい。とにかく途中でリタイアだけは避けて欲しいというのが、私の要求水準だった。

とも知らなかった。タバコを吸っている人が速く走れる訳がないから、ここはやはり当初の予定通り、茂木さんに入ってもらい、藤田さんは補欠」ということに決めた。藤田さんも納得したらしく、茂木さんとの間で話がついた。しかし、そこから藤田さんの葛藤が始まった。その辺りの事情は藤田さんのエッセイに譲るが、七キロの距離はそれだけ長くて、荷が重いということだ。

マルギット島を走る

私自身も、ここ二年は室内のランニング・マシーンを走ってはいるが、屋外を走っていない。ロードレースに出ることはまったく考えていなかったし、故障箇所が多く、定期的に通風の炎症も出るので、堅いアスファルトの道を避けていた。しかし、いくらなんでも、野外で練習しないで、いきなりロードは難しいだろうと思ひ、大会まで一週間を切ったと

ころでハンガリー人メンバーと一回、茂木・藤田の日本人メンバーで一回、マルギット島を一周した。屋外の練習はそれだけ。たいしたスピードで走った訳でもないのに、いやにへばった。これはまずいという不安がよぎったが、茂木さんが走るにせよ藤田さんが走るにせよ、両氏とも七キロは完走できると確信できた。藤田さんの走法に大いに修正の余地はあるが、それを言っている余裕はない。とにかく、どちらが走るにせよ、途中でリタイアしないで、一定のペースで最後まで走って欲しい。それが私の願いだ。多分、恒平は練習していかないだろうが、最後まで走ってくれるだろうと考えていた。少なくとも三五分程度のペースで。

八〇〇米の練習をしていた頃は、マルギット島を良く走った。ブダ側を見る直線道路には、一〇〇米ごとに一五〇〇米まで白いペンキで印があり、時間を計れるようになってい

る。恒平が高校生の時には、何度も一五〇〇米の競走をした。五分三〇秒程度の競走をしていた。調子の良い時には五分程度で走っていたが、膝を痛めたり、定期的に通風発作が出たりするために、トレーニングを続けるのが難しかった。一九九九年の夏は五分を切るスピードまで回復して、九月の八〇〇米を走ったが、以後は屋外でのトレーニングを止めてしまった。

今、マルギット島に一米幅の周回路が整備され、その中央部には三〇センチ幅のゴムが埋め込まれていて、足の負担を軽くする工夫がなされている。今回、何年ぶりかで走って見て、初めてジョッキングコースの整備を知った。

九二〇チームが参加

今回のマラソン・リレーには、なんと九二〇チームが参加した。国会前を出発点にして、ドナウ河沿いに

アルパード橋近く（ヘリア・ホテル裏）まで行き、そこから折り返して、鎖橋まで戻り、そこで再びターンして、国会裏手前から上の道路に上がり、再び鎖橋方面に戻ってから、国会前広場に向かう。これで七キロの周回コースになる。六名全員が同じコースを回る。この行事のために、この周回コースは完全封鎖されている。

参加者は六千人近い。応援まで入れると、七千人はいる。いや、もっといるだろう。地方から仕立てたバスも多かった。バイチジリンスキー通りに向かう国会正面の道路はテントで満杯。今まで知らなかったが、これはハンガリーの一大行事の一つなのだ。

日本の駅伝と違い、タスキを渡すのではなく、バーコードが付いたやや細めのバトンを持って走る。距離が長い場合には、バトンを持って走るのは合理的でない。日本で使った

すき」は、欧米人にとって異質なのだろうか。大会本部は最終走者のゴール時間だけを測定するから、スプリットタイムは各自で記録しなければならぬ。実際にはバトンを係員に渡してから、一〇秒ほど経過して記録されているから手際が良いとは言えないが、全体の運営は良く組織されていた。



第 10 回オリンピック・マラソン・リレー記録(2003 年 6 月 1 日)

名前	Split Time (経過時間)	Lap (周回時間)
Toth Attila	split 1: 30 分 33 秒	lap 1: 30 分 33 秒
Torma Peter	split 2: 1 時間 02 分 33 秒	lap 2: 32 分 00 秒
Szabo Zsolt	split 3: 1 時間 34 分 40 秒	lap 3: 32 分 07 秒
藤田 剛宏	split 4: 2 時間 08 分 20 秒	lap 4: 33 分 40 秒
盛田 恒平	split 5: 2 時間 45 分 22 秒	lap 5: 37 分 02 秒
盛田 常夫	split 6: 3 時間 14 分 49 秒	lap 6: 29 分 27 秒

さて、我が「日本・ハンガリー友好チーム」の成績は、表の通りである。男子一般五三〇チーム中、一一七位であった。予想通り、三時間を切れれば一〇〇位以内。二時間三〇分を切れれば、一〇位以内である。ジュニア、一般、シニアはチームの年齢合計で決まる。一一〇歳までジュニア、二二〇歳まで一般、それ以上がシニアということになる。女子のクラス分けも同じで、この他に会社チーム、メディアチーム、軍隊チームがあり、合計で九二〇チームが参加した。総参加九二〇チームで見ると、わがチームは一九一位である。

ほとんど練習しないで参加した割には、上出来という所だろうか。最高タイムを出したのは、もちろん現役の選手で構成されたチームで、二時間七分でゴールした。一人七キロを二一分平均で走っている。男子の世界記録がこれより二分ほど速い。日本の高校駅伝マラソンで、男子が

二時間五分前後、女子は二時間一五、一七分前後が優勝タイム。
一人で走って二時間三〇分を切るのは、かなりの走者であることは間違いないが、それにしてもラドクリフの二時間一五分は驚異というしかない。

来年を期そう

来年の目標は決まった。とにかく、三時間を切ること。もっと日本人参加者を募りたい。駅伝本場の日本から、我々のような混合の素人チームが一つだけというのは寂しい。ジュニアチームや女性チームの参加があってもおかしくない。記録を狙うチームと参加を楽しむチームに分けたい。記録を狙うからには、二時間五〇分を目標にすべきだろう。参加を楽しむチームも良い。参加チームの半数以上が、三時間半を超えている。四時間を超えるチームも多い。老若男女、小さな子供から老人まで、本

当に走れるのかと思うほどの巨体の人まで、人それぞれのペースで走っている。いったい、ライバルを抜いているのか、周回遅れを抜いているのか分からないほど、入り混ざっている。私がゴールした後も、まだ四人目五人目のバトンを待っているチームもいた。年に一度、とにかく七キロを走るといってお祭りのようなものだ。

私自身は、もう少し目標を高くしたい。今回の目標は二八分だった。調子が良ければ、二八分を切れると考えていた。しかし、現在の体調を過信していた。百平均二四秒で七キロを走りきる状態になかった。薄く軽いシューズを選択したのも間違っていた。一キロも走らないうちに、膝の痛みが出た。走っていて、スピード感がなかった。こんなはずではないと思いつながら、それでも最初の二キロは七分四〇秒で通過し、目標タイムを狙ったのだが、三キロ地点

で早々と貯金を使い果たしてしまった。途中から上空を覆っていた雲が切れ、夏の強い日差しが容赦なく照らし出し、ほとんど加速するエネルギーを失ってしまった。後は、とにかく我慢。こんなに苦しい思いをしたのは、久しぶりだ。

とりあえず、秋のカイザー国際駅伝マラソン大会を目標に準備することに決めた。この大会は国際マラソン大会とマラソンのハンガリー選手権を兼ねた大会なので、個人ランナーとの競走になる。個人の遅いランナーと競走できる程度に、最低でも二時間五〇分程度で走れるメンバーを構成する。チームは五名。最長区間が一二・六キロ、最短区間が六キロである。今度はもつと軽快に、八キロを三〇分で走り切りたい。八キロの距離の感覚を掴むこと、スピードを維持する練習を始める。それから、体重を三キロ絞る。これで新しい目標ができた。



補習校児童作文

遠足

三年 谷中 理沙

五月三十日(土)、日本人ほしゅう校のはじめての遠足でした。

ハンガリーへ来てはじめて動物園へ行きました。そこには、おもしろい鳥がいきました。なぜおりに入っていないのかな、とんでいかなのかな、とふしぎに思いました。さるもおりに入っていない、どうしてにげないのかと、とてもふしぎです。ライオンを近くで見たのは、はじめてです。ライオンの足のつらをみればびっくりしました。わたしの顔ぐらひありました。とってもこわかったです。

それからこの日は、はじめてサーカスを見ました。さいしよは、歌ばかりだったので、すこしねむくなってしまいました。そのあと、アシカショーとか、

へび、ねこ、わにがでてきました。わたしは、五れつ目ぐらいだったからかまねなくてよかったです。

楽しかった

三年 あきざわ けんこ

ぼくは、遠足に行きました。さいしよに動物園に行って、オオカミと虫がいつばいいる所に行って、そこでバツタとむかでとくもを見ました。そこでバツタをずっと見ていたら、ちょっと気も変わるくなってしまつて、見るのをやめました。

次にサーカスを見に行きました。ピエロと動物のショーがおもしろかったです。ピエロがアヒルをてっぽうでうってたけど、あたつてないと言っていました。それと、ねこがぼうにのったり歩いたりして、それとアザラシがボールあそびをしていてとてもおもしろかったです。

次は、おべんとうでぼくのおべんと

うは、おにぎりとかからあげでした。それからサッカーをしてとても楽しかったです。また今度行きたいです。

楽しかった遠足

小学四年 栗田和征

最初に動物園へ行って、いろいろな動物を見ました。見たことのない動物がたくさんいました。次は歩いてサーカスを見に行きました。マジックがおもしろかったです。その後、公園に行つておべんとうを食べました。すこくおいしかったです。

休み時間に陽介君とバル二君とベンツエ君と島田先生とサッカーをしました。楽しかったです。

バドミントンをしよう

小学四年 横山聡美

五月三十一日におべんとうを食べました。おべんとうが終わると上坂さん

とバドミントンをやりました。仲川先生と島田先生と知沙ちゃんとかかなちゃんともやりました。とても楽しかったです。しょう子ちゃんともゆりちゃんは上坂さんのおじさんをおうえんしました。私は、上坂さんと仲川先生をおうえんしました。でも、上坂さんが、かちました。それで仲川先生は、まけました。もうバスに乗る時間だったので、バスに乗りました。私は、バスの中でねました。私がおきたらほしゅうこうにいました。そばには、お父さんの車がありました。お父さんの車で家に帰り、シャワーに入りました。夕ごはんは、石やきステーキを食べました。家では、お父さんと二十分間、バドミントンをやりました。それで私がかちました。

サーカス

小学四年 エルドシュ・バルナバシュ

五月三十一日にえんそくにいきま

した。サーカスのテントに入って、みきとくんとあきざわくんのとなりになりました。いちばんいんしょうにのこったのは、ピエロです。とくにピエロの女の人が水にはいるうとして、男のピエロがきました。男のピエロは、女のピエロが水にはいるのをじやましました。でも、つまらなかつたです。なぜかというところ、ほとんどがダンスだったのできもちわるかつたです。あと、へびとワニがでてきました。ワニは、口をあけられないよう、口になわがしばってありました。あと、マジックもやっていました。女の人がここにはいって、手も足もばらばらでちがうところにあつてきもちわるかつたです。ぼくのはんのはんちようは小野田ようくんでした。すこくたのしかつたです。

つまらなかつたサーカス

小学四年 せざきみきと

ほしゅうこうのえんそくでサーカス

に行つた。でも、つまらなかつた。なぜかといつたらほとんどすべてダンスだったからだ。ぼくは、さいしよは、「ライオンがでてきて、水のわくぐりをする。」と思つていた。バルニとおなじはんだったから、バルニからわるいハンガリー語をおしえてもらった。まん中では、フリータイムは20分で、サーカスのロビーを4周まわつた。そして、しょだいのサーカスの写真を見て、「こつちの方がました。」と思つた。サーカスがはじまつたら、「ゲームをやります。」とかいの人が出つたので、ぼくとバルニで手をあげました。だくだむしされました。「ガーン。本当は、ぼくたちがでて、ゆうしようして、ウイスキーをゲットして、お父さんにあげたかつたな。」と思つた。



びっくりしたサーカス

小学四年 清水陽介

五月三十一日のえんそくで、ぼくはサーカスを見たことがあったので、「つまらないな。」と、思いながら入って行きました。なん分かつたら、休み時間がありました。ぼくは、「え〜っ」とびっくりしてしまいました。なぜかというところ、最初にサーカスを見に行った時、この休み時間に家族全員でサーカスを出ていってしまったのだ。ハリー語でなにやら言っているの、ぼくたちは終わったかと思って、出ていってしまったのです。

今回は、休み時間のあと楽しくサーカスを見ました。といったびっくりな日でした。

楽しかった遠足

小学五年 園部 健

遠足は、動物園から始まりました。

動物園では、行きたい所になかなか行けなくて、やっとの思いでさそりやほかの虫たちを見ることができました。他の班たちが、楽しみにしていたアザラシのショーは、アザラシたちがつかれているので、やりませんでした。

次に、サーカスへ行きました。サーカスでは、いろいろなことをやっています。ぼくが好きだったのは、なわとびと火を口で消したり火を吹いたりするショーです。なわとびでは、ぼくてんや、いろんなことをやりながら飛んでいました。一番びっくりしたのは、二人の男の人が一人の女の人の手足を捕み、女の人がなわとび変わりになつて、もう一人の別の女の人がもう一つのふつつの、なわとびといっしょに、ぴよんぴよん飛んでいました。

火を口で消したり吹いたりするやつでは、火のついたぼうを手にのせて、吹いたら火が思いつきりばああと、燃えたときは、一しゅんだけむあぁ、と熱くなりました。

サーカスが終わり、市民公園で弁当を食べて、サッカーをやり、そして楽しい時間は、あっという間にすぎ、遠足を終わりました。

今度の遠足が、楽しかもしれません。

悲しかったが、うれしかった遠足

小学六年 太田 祥子

今日は、補習校の遠足だ。私は、古川友梨ちゃん(班長)の班で、副班長だった。私達は、七班だったので、バスの二号車に乗った。

「ブーン。」バスが出発した。しかし、行く途中、ある動物の死があった。車にひかれ、べしゃんこになっていた。そして、それは、ハリネズミだった。

ここでは、よく、ハリネズミがひかれているらしい。

だが、とっても悲しい気持ちはすぐにふつとんだ。なぜなら、この日猫のサーカスを見ることができたからだ。

猫のサーカスは、たしか、ロシアのサーカスだ。「動物奇想天外！」という番組で、そのサーカスを見た。とても、猫がかわいかったので、いつか見たいと思っていた。そして、そのサーカスを、今回の遠足で見ることができた。猫がつな渡りをしたり、玉乗りをしたり、とてもかわいかった。この遠足で夢がかなった！やった！と、思ったが、完全にはかなっていない。なぜなら、「最初から最後まで」猫のサーカスではなかったからだ。

いつか、本物の猫のサーカスを見たいと思っっている。

遠足の楽しさ

小学六年 横山 ゆか

補習校の遠足で初めに行ったところは、動物園でした。一番気に入った動物は、ペレットでした。目が、とてもクリクリとしていてとてもかわいかったです。一年生や二年生くらいの子は、

班から離れて好きな動物を見ようとしていて、ずっと注意していました。佳奈ちゃんと私で力を合わせて、小さい子が迷子にならないようにしました。

サーカスでは、小さい子供達は、静かにすわって夢中になっていました。ここでは、私たちもちょっと一息つきました。サーカスをやっている人たちは、まるでタコみたいにクネクネしていました。私にとってサーカスで一番心に残っているのは、ネコ達の芸でした。とてもかわいくて、私たちのような普通の子どもにはとてもできないことをやりました。

次は、市民公園でお弁当を食べました。補習校のみんなで食べるお弁当は、アメリカンでのお昼ごはんよりも十倍以上おいしかったです。お弁当の後に友梨ちゃん達とおにごっこを遊びました。小さい子供達は何をしているかなあと、見てみると、とっても楽しそうに大なわとびをしていました。今まで大変だったことが、全部消えてし

まいました。

この遠足は、忘れられないと思います。

嫌だったこの国が・・・

中一 清水 郁馬

僕は、今ハンガリーにいる。

それを聞かされたのは小四の正月、父と親戚の話だった。

その頃、僕は当時の学校や友達に満足していたのだった。だからハンガリーに行くと言われた時は涙が出るほどショックだった。ハンガリーに行きたくないという理由は、それだけではなかった。学校や言葉はどうなるのか。など・・・心配は山ほどあった。

しかし、二〇〇一年夏、ついにハンガリーへ来てしまった。初めは、数々の不満や心配を持ってアメリカンスクールと、ブダペスト日本人補習校に通い始めた。

学校や言葉も心配だったが生活の方も不満はあった。なにしろ、ハンガリーはほとんどの物が遅れている。それから、食べ物にも困った。まず、内陸国だから輸入品以外の海の魚はない。パンだつて食パンみたいな日本人がよく食べるようなパンではない。

唯一、楽しかったのは隣の国、オーストリアのウィーンに買い物に行く時だった。オーストリアは、EUに入っているから、数々の物が輸入品として、オーストリアに入ってくるのだ。

そうやって、いろいろなることを工夫して、ハンガリーの日本人は暮らしているのだ。

そんな中でも二つだけハンガリーに来て良かったと思う時があった。

一つ目は、他のヨーロッパの国々へ行けるということだ。今まで行った国は、オーストリア、スペイン、イタリア、チェコなど・・・。

このような体験は、日本にいたらできなかつただろう。こういうことを考えたらハンガリーに来たことも悪くないなと思ひ始めた。

二つ目は、アメリカンスクールと補習校という二つの学校へ通つて、たくさんの友達を作り、いろいろな国の文化や考え方を学べるということだ。まず、アメリカンスクールでは、僕の知らなかつた国のことが分かつたり、いろいろな経験ができる。

例えば、日本の小学校ではまだ習わない、外国の地理や歴史を学んだり、それから理科も日本よりは進んでいると思う。また、日本でいう小学三年生から、高校生までがいつしよの校舎に通うので日本で分けられた小学校、中学校、高校とは少しちがう感じがある。

最後に、補習校でも、小学生から高校生までいつしよの校舎だから、日本ではあまり考えられない、他の学年との交流も少くない。現に、

この僕がよく、中学二、三年の人とも遊ぶし、遠足などの行事では後輩の面倒も見る。

こういう、全く異なつた国籍の人や、ちがう学年との交流が僕は好きで、とても良いことだと思ふ。

これからも、ハンガリーの友達を大事にして、あとどれくらいいるか分からないこの国、ハンガリーを楽しもうと思ふ。

欧州と日本 違う良さ

中一 栗田 晃孝

僕は今、ハンガリーのブダペストに住んでいる。二〇〇二年八月にこの地に降り立った。

その年の四月、父からこの事を告げられた時、第一に悲しかった。理由は三つある。

一つは、住み慣れた、自分の中で一番だつた町を、離れなければならぬことだ。友達と一緒に行った清

流の流れる山、釣りに行った川、自転車を走らせた道路……。僕は、この町がとても好きだった。

二つ目は、野球部を退部しなければならぬことだ。僕はアメリカのメジャーリーグにあこがれていて、いつか自分もプレーしてみたいと夢見ていた。四年の頃から入った野球部だけど、四ヶ月くらいで左翼手レギュラーだった。練習はすごくきつかったけれど、厳しい練習の中にも笑いがある、良いチームだった。チームメイトも優しく、良い友達だった。

第三の理由は、家族と離れて暮らさなければならぬことだ。僕は、今一緒に暮らしている家族の他に、日本で年の離れた兄と祖母と暮らしていた。だが、今は離れて暮らしている。僕の大好きな野球を教えてくれたのも、兄だ。兄は、優しく、真面目で思いやりのある、最高の兄だ。僕は、弟達に対する兄のふるま

いを見習わなければならぬと思う。祖母も、僕に料理やそろばんの他色々な事を教えてくれた。

これらの理由の他、食べ物にも苦労した。僕は、兵庫県出身なので、たこ焼きを食べることが多かった。しかし、ハンガリーは内陸国だから、生タコはめつたに売っていない。売っていても高い。皆、魚介類を手に入れるには一苦労だ。

次に、ハンガリーに来て良かったことを書きたいと思う。

まず、物価が日本にくらべてすごく安いことだ。僕は、無駄遣いすることがあるので、ハンガリーの二フオリント＝一円という株価には感謝している。

次にテレビ番組の内容により、一部のチャンネルが決まることだ。ハンガリーのテレビ番組の一部は、一日中同じ種類のものを放送するのだ。番組表は必要ない。

ハンガリーにおいて、一番良い事、

それは国籍をこえて、世界各国の人々と出会うことができることだ。これは、日本ではまず不可能であろう。この人達と話す事で、前代未聞の未知なる世界を知ることができる。そして、世界をいろいろな方向から見る事は、すばらしい経験だと僕は思う。僕は、世界の事を理解し、良い未来を築いていきたいと思う。

ハンガリーに来て

中三 手島慎平

ある夏の日に僕が平凡に遊んでいて、何よりもこの時が一番と感じていたその時であった。家に帰り、くたくたになって座って、夕飯を待っている、突然お母さんが近づきこんな事を言った。

「慎平、実はねお父さんの会社の関係でハンガリーって所に行くことになったの。」

この瞬間、僕の目に涙があふれ出

た。僕は家族の考えを理解できなかった。僕は大人から見たら、行ってみたい、住んでみたい、子どもにはいい経験になるだろうとか考えるかもしれないが、僕の気持ちには正直言っ

てそんな気持ちはなかった。僕はハンガリーに行く日、車のトランクの中に隠れた。今でも覚えて

いるが、それほど僕はハンガリーに行くことが嫌だったのだ。僕は今ハンガリーに来て世界は狭いと感じているが、この頃の僕には知るよしも無かったのである。ハンガリーに来て新しい学校に行った時、僕は英語を全く話せなかった。日本で英会話教室に通っていても無駄というより、日本人というのはスピーキング、つまり会話が得意ではないことが分かった。日本人は自己紹介が得意ではない、自信が無いというのも分かった。しかし、英語を覚えるというのが自分に自信を持つことにつながるようになることが分かつ

てきた。

そして、日本語を忘れないために補習校にも通い始めた。一週間に二回しかないけれど、その時は唯一の楽しい時間でもあった。それは、僕は英語が話せないからである。時間が経つにつれて、英語も上達し、周りも見えてきた。

こちらでの生活に慣れ始めたある日、家にいる兄が高校の関係で日本に帰ることになってしまった。僕の兄は弟思いでいつも僕に優しくしてくれた。いつもそこに兄がいて、どんな時でも兄がいて甘えさせてくれた。この時の僕の悲しみは言葉に言い表せない位だった。この頃、友達が日本に帰ることがあったが、兄以上に悲しいことは無かった。

この日から僕の考え方は変わった。僕はもともとネガティブ思考であったが、前にも増してそれが強くなった。しかし、そんな僕を救ってくれたのは友達だった。

考えてみると、ここに来て成長したことは、英語の上達でもないし、自分が強くなったわけでもない。一番成長したのは、人間として成長できたと感じている。ここに来る前の自分というのは何に対しても甘えていたのである。お菓子を食べたい、日本に帰りたいたいと言いつつ、最近では自分の甘さを痛感した。

昔の自分と今の自分を見ると、昔とは全然違って、物事に対して我慢していけるようになったと思う。ハンガリーに来て得られた大きなものとは、自分では気づいていなかった「自分」というのを客観的に見ることができたことである。この作文を書いてやっと自分の「成長」というものに気づいたと思っている。

補習校の現状と将来のあり方

補習校運営委員会幹事

山崎利樹・上坂 彰

ご父兄の皆様方、及び日本人会の皆様方へ

『ドナウ通信 春季号 第五五号』に、前運営委員長の横山氏と、前派遣教諭の吉原先生から、補習校の今後のあり方について寄稿があり、その中で、現在の補習校を全日制日本人学校またはいわゆる補習校（派遣教員なし）のどちらに移行させるのか、本年中に結論を出して文部科学省に報告する必要があると述べられています。

本年二月に実施したアンケートでは、いわゆる補習校（派遣教員なし）を希望される父兄が過半数を上回り

ましたが、全日制を希望される父兄の切実な意見も多数寄せられました。また、補習校を希望された方の中にも、「選択肢は多い方が良い」との意見があり、先ずは全日制日本人学校設立の可否について検討することになりました。

本年四月に、今年度の補習校運営委員会のメンバーが主体となって「日本人学校設立検討委員会」を結成し、大使館のご支援の下、受け皿となる校舎探しを始めました。現在までに、区で廃校となった校舎を何件か視察し、賃借可能な物件があることを確認しました。但し、建物が古く、修繕にかなりの費用がかかる上、交通の激しい地域でもあることから、区以外にも範囲を広げ、校舎の共同使用や買い取りなども視野に入れて、調査を継続中です。以上が、「設立検討委員会」結成の背景と、現在までの活動状況です。一方、補習校の運営に目を向けると、

ここに来て状況が大きく変わってきました。

補習校の経営状況と今後の収支予測

補習校は授業料（全収入の六％弱）と商工会からの寄付金、政府援助金、昨年度からは個人所得税の％寄付も加わり運営されております。収支の流れを二 二年度から二 五年度まで試算したところ、以下の表ようになりました（円は千単位という意味です）。

補足説明；

収入は現行の生徒数と授業料をベースとした試算です。
支出は毎年の昇給とインフレを考慮に入れて計算しています（先生方には、昨年度末に最高約二％の給与カットをお願いしています）。教員派遣の打ち切りは考慮に入れてありません。

	2002年	2003年	2004年	2005年
収入合計(Ft)	63,665K	64,794K	64,917K	65,032K
支出合計(Ft)	67,424K	64,590K	79,481K	85,133K
収支合計(Ft)	<u>-3,759K</u>	203K	<u>-14,564K</u>	<u>-20,100K</u>

二 二年度は前年度からの繰越金を取り崩して赤字を埋めましたが、二 四年度では繰越金を充当しても完全に赤字決算、即ち「SEI」は倒産と予測されます。従って、来年度以降は毎年大幅な授業料の値上げと、商工会からの寄付金の増額をお願いする必要があります。

基本的なあるべき経営方針

将来に渡って、私たちの子供達、あるいはこれからブダペストに移り住む子供達が不安なく日本人学校に通うためには、生徒数の減少や備品（PC、Copy機等）の買い換え、その他突然の支出に耐え得る経営上の備えが必要です。そのためには、次期繰越金を準備金として常に安定的に確保しておく事が、必要不可欠と判断します。

経営問題と補習校/全日制学校との関連

補習校か全日制かという議論の中で、補習校を選択する場合は、授業時間数の維持が優先か、授業料の維持が優先か、という議論がありました。この点に関しては、上記収支予測から、授業時間を優先するかどうかに関わらず、授業料の値上げは必要な状況です。授業時間数を維持するための教員の増加は上記収支予測を更に悪化させます。

仮に週一回の授業とし、授業時間数を大幅に減らした場合でも、クラス数は変わらないため、教員数を大幅に減らすことはできません。授業時間数の減少に応じて教員の給料を減らそうとすれば、教師を副業として生計を立てる道を持たない限り、先生方は生活を維持出来なくなり、結果として現地採用教員を確保できなくなる可能性があります。

今後の方向性について

以上の通り、安定的な経営を維持するためには、補習校を「**全日制日本人学校**」に移行する事が唯一の方法であると判断します。全日制日本人学校に移行した場合は、必要教員数の約八割は文部科学省から派遣されるため、授業料は現行のインターナショナルスクール（アメリカンスクール等）に比べ、大幅に軽減できますので、安定的な財源の確保が容易になります。

今後は、前述の校舎選定作業を進め、利用可能な候補物件が出揃ったところで、費用の見積りと各社負担案を作成し、商工会の承認を得た上で、正式に日本人学校設立準備委員会を発足させたいと考えます。皆様方のご理解、ご協力を賜りたく、宜しくお願い申し上げます。

編集室より

次号の締め切りは、九月下旬とさせていただきます。

TEL/FAX:

e-mail: nihonjinkai@axelero.hu

電話・FAXが変わりましたので、「」
注意ください。

ハンガリー日本人会事務所移転のお知らせ

二〇〇三年一月より下記に移転致しましたのでご連絡申し上げます。

ハンガリー日本人会

Magyarországi Japánok Szervezete

Address: H-1054 Budapest V. Zoltán

u.13 I/1

Tel/Fax:

(+36-1)373-0400 (代表)

e-mail address :

nihonjinkai@axelero.hu (代表)

なお、商工部会事務も同所で行う事になりました。

e-mail address:

shokobukai@axelero.hu (代表)

【事務局便り】

二 三年もあつという間に半年が過ぎました。ゲーム大会をはじめ会員の皆様方にはご参加を頂きありがとうございました。

特に本年度は在留邦人の一割を絞める音楽留学生の協力を得、三月九日に「春」をテーマにした音楽会を企画、日本大使館との共催で開かれました。日本人及びハンガリーの方にも越し頂き観客数は二百名を超えました。クラシックコンサートではあまり聞くことのない「ノリの良い曲」や「題名は知らなかったけど聞いたことある曲」などプログラムもバラエティー

に富んでおり、大変楽しい時間を過ごすことができたかと思っております。演奏会全体の時間が少々長かったとの反省もあり、次回に反映させていきたいと思っております、

五月には、第一回ソフトボール・ソフトバレー大会。当日朝、準備中の雨に少々心配しましたが、九時前にはウソのようにやみプレー開始。今年は、ソフトバレーの参加者が若干なかつたような気がしますが、なんとか5チームできました。優勝はエンジェルズ、二位デンソー、三位M・スズキチームでした。その他Friends、コーギ&チワワーズの活躍も頼もしかったです。

大人にはやはり勝てませんが、毎回毎回子供たちの上達の早さには驚かされます。今回は参加した子供達全員がバッチリサーブをきめてくれました

た。秋のソフトバレーが楽しみです。一番印象的だったのは、お母さん方が子供達に「がんばれ!」「よくやった!上手上手!」など誉め言葉をかけられていたことです。そのときの子供達のキラキラした瞳!応援して下さったお父さん方も出場者のハッスル振りに感心しておられました。ソフトボールとの兼合いで時間調整が困難ではありますが、益々多くの応援を頂ければ幸いです。(もちろん参加も皆様よろしく願います!)

ソフトボールはかなりの打撃戦となり結果は優勝を狙うサンヨーが商会Bに二三対二で負けてしまいました。三位は住商。お父さんパワーもすごい!

六月二日、二日は、補習校と大使館で巡回健康相談が行われました。百四名の在留邦人の方々が受診さ

れ、またほとんどの方が耳鼻咽喉科の先生と内科の先生にも診て頂き、安心された方も多かったことと思います。日頃の不安を日本語で相談できる良い機会としてご利用頂けましたら幸いです。

最後になりましたが上半期の日本人会行事にご協力くださった理事・幹事の皆様に心より御礼申し上げます。なお、日本人会事務所は七月二二日から八月二日までお休みとさせていただきます。

皆様、楽しい夏休みを過ごされますよう、事務局スタッフ一同お祈り申し上げます。



二 三年第一回
ソフトボール・ソフトバレー大会

ソフトバレーボールに参加して

堀部 ゆかり

「今朝、すごい雨が降ったね。今日は中止かと思っただわよ。」

「えー、今朝我家のまわりは、ぬれていなかっただけど雨が降ったの？」
「密かに楽しみにしていた私は、まさか雨が降るとは思わず、受け入れられない気持ちで雨雲を遠ざけたのか、暢気に眠っていたのか、定かではありませんがこんな会話で、ソフトバレーボール大会の日が始まりました。我がチームは、エンジェルズ。前回に引き続き二度目の出場です。メンバーは、好さん、幸代さん、真美ちゃん、民子ちゃん、恵美子ちゃん

そして私の六人で構成されています。バレーボールが好き、お酒が好き、笑うのが大好きという共通項で集まりました。チーム名の由来は、かわいいエンジェルを持った母親の集まりとか自分自身が天の使いであるエンジェルとか、いろいろ言われていますが、みんな好きなように解釈しています。

さて、試合の方ですが初めエントリーチームが二チームで「いきなり決勝戦なの？」という感じだったのですが、徐々に参加チームが増えて結局五チームの総あたり戦ということになりました。

一回戦目は、元バレーボール部出身という先生を混じえての補習校チームとでした。好さんのお嬢さんも入っていたので親子対決ということでもやりずらかったのですが、対戦チームはバシバシスマッシュをきめてきたので、私達も思いつきり楽しませて頂き、二対〇でストレート勝ちしました。

ト勝ちしました。

三回戦目は、スズキチームでした。若い奥様パワー全開というスズキチームには、確実にボールを返すことで二対〇のストレート勝ちをしました。

最後の対戦は、デンソーチームとでした。若い奥様と熟練の奥様のパワーに押されつつも、「エンジェルス、ファイトツ、オー」の掛け声でお互いを励ましつつ、何とか二対〇でストレート勝ちしました。

お蔭様で今回も優勝でき、二連勝を果たしました。さわやかな汗をかき、賞品のお食事券で祝賀会をさせて頂き、大満足です。

このように私たちが楽しませていただけるのも日本人会の事務局の方々やこの大会の準備に携わって下さった方々のお陰だと深く感謝しております。この場をお借りして、お礼申し上げます。ありがとうございます。

ソフトボール優勝への軌跡

商工会 B 監督 石崎 成則

今回、佐分利スポーツ理事より商工会 B チームの監督を仰せつかりましたが、何と優勝までしてしまい、この原稿を書くハメとなりました。

最初は、どうせ勝てないので適当にメンバーを決めたらと思っていたら、熱心な某運送会社の O 氏から私信のメールを頂き、「是非優勝を狙いましょう」と強く説得され、知らないうちにその方向に気持ちがいっていきました。実は試合の前にもいろいろと駆引きがありました、まずは商工会 A、B のチーム編成で、勝敗は九〇%これで決まると思われる。商工会 A チームの監督、某工務店の I 氏には適当に分けましょうとさり気なく言っておき、実際のチーム分けの時はチームワークが大事ですから去年のメンバーを頂きますねとしっかりと確保し、ポイントは人数

を少し少なめにして後で個別に電話して補強すると言う作戦を取りました。(実は自分が出場できる枠を残す為) 作戦大成功で某電気会社から強力な助っ人を三人獲得できました。しかし問題は直前まで女性選手が見つからず、前出の某運送会社の O 氏



をお願いし、いろいろと引越しでの顔の広さを駆使してさがして頂き、また、日本人会の S 嬢にもお願いして何とか美女三人を確保しました(名前は省略)。これがまた大正解で(野球の腕はお世辞でも良いとは言えませんが) 何せ非常ににぎやかでチームのムードを一手に盛り上げホームランの起爆剤になったのでは思いません。この様に試合前に悪戦、苦

闘して勝負のほとんどは決まったのではと思っています。それではここにその強力なメンバーを紹介します。

- 一番レフト大沢 日通 高校野球経験
 - 二番サード中村 sony
 - 三番センター白田 協和
 - 四番ショート高畑 Maxell 高校野球経験
 - 五番ライト林 sony 高校野球経験
 - 六番 ファースト石崎 協和
 - 七番 キャッチャー中崎 sony
 - 八番 ピッチャー武藤 日通 癖ダマ
 - 九番 セカンド 女性 独身 MVP
- その他控え選手は省略

最後に今回はホームランが非常に乱発して例年より距離が短かったのではと皆様感じられたのではと思います。陰の立役者(陰の MVP)として佐分利スポーツ理事を上げたく思います。

番組「ミッコ」にたいする 日本人会の対応

番組「ミッコ」

TV2局が今年三月の番組改正で、目玉番組として放映を開始した番組「ミッコ」釣りが上がった目で見た世界」は、TV2で売り出した人気タレントのシュタール・ユードイットが日本人テレビ・レポーターに変装して、ハンガリーの有名人をインタビューして困らせる「ドッキリ番組」である。そのこと自体は何も問題ないのだが、その「日本人レポーター」が、「出っ歯」と分厚い黒縁めがねで変装し、奇妙なイントネーションと意味不明瞭なたどしいハンガリー語を話し、知的障害を想起させる設定になっている。番組の中では、日本の習慣や文化の一端なども紹介されるが、非常に奇妙で誤解のあるものである。

このような「日本人ミッコ」のイメージは、ハンガリーの視聴者に、日本人と日本文化にたいする偏見や差別を生み出す可能性がある。実際、公共の場で、日本人女性が「ミッコ」と声をかけられる事態も発生している。学校などの教育現場で、「ミッコ」の変装や話しぶりを真似て、日本人をからかうイジメが起きることが懸念される。

大使館の抗議

在ハンガリー日本大使館は、四月初め、この番組の放映開始直後に、TV2にたいして、日本人と日本文化を誤解させるような番組の放映には問題がある旨の書簡を送った。これにたいして、TV2側はポイチ番組制作部長が大使館を訪れ、日本人にたいする偏見や差別の意図がないことを説明し、番組の副題である「釣り上がった目で見た世界」を消去し、かつ「番組に登場するレポーターは

架空の人物である」というキャプションを入れるという「改善」案を提示した。

TV2の説明によれば、この番組はオランダの制作会社から購入したライセンス番組であり、オランダで問題になっていないのに、どうしてハンガリーで問題になるのかという疑問を呈した。

日本人会の対応

日本人会理事会は四月二九日に全理事を招集し、この問題にたいする対応を話しあった。そこでは、「ミッコ」の最新ビデオとともに、TV2から提出されたオランダの番組のビデオも検討された。

この検討を踏まえ、理事会はTV2が提示した対応では不十分と判断し、番組の放映中止を求める書簡をTV2のピンテル会長に送付するとともに、商業テレビの監視委員会である国会付属のORFにたいして番組の審査

と制裁を求める書簡を送り、さらに国会の「ハンガリー・日本議員友好連盟」のコーシャ議長に理解と支援を求める書簡を送付した（巻末資料参照）。同時に、日本人会の声明文を用意し、これをハンガリーの通信社ならびに主要日刊紙編集局に送付した。日本人会声明は、翌日の日刊各紙に報道された。

その後の展開

コーシャ議員は、日本人会の要請を受けて、コヴァチ外務大臣にたいして、「ハンガリーと日本の友好関係を損なうような番組の放映中止を、TV2のピンテル会長に求めるよう」迫り、国会議場の廊下から、コヴァチ大臣が電話でピンテル会長に厳しく番組の中止を求めた。

この番組をめぐる問題は日本でも報道され、在日日本ハンガリー大使館が対応に苦慮することになり、当地の日刊紙 *Magyar Nemzet* が、「番組『ミツ

コ』が日本でスキャンダル」と報道して、TV2を慌てさせることになった。さらに、父親が日本人のハンガリーの青年が *Ország* にたいして、番組の中止を求める要請をおこなったの続き、 *FIDESZ-MDF* 会派のバルシャイ議員が同じく番組の偏向を理由に番組中止の苦情申請をおこなった。

TV2の提案と回答

問題の波紋が大きくなり、小手先の変更ではことが済まないと考え、TV2は五月中旬、大使館にたいして、「六〇八月の三ヶ月、番組の放映を中止する。日本文化の紹介の番組を制作する。シユタール・ユードイットが主宰する料理番組に日本人家族を招待して、日本料理の紹介をおこなう」等の新しい提案をおこなった。

このような提案をおこなう一方で、TV2のケレステイ社長は、番組「ミツコ」は衣替えをして、秋から別の形式で放映されると新聞インタビュー

に答えている。

また、日本人会への抗議にたいしては、六月に入つて、ピンテル会長名ではなく、ポイチ番組制作部長名で返答し、「大使館に回答した内容のコピーを送る」とだけ書いた書面を、日本人会会長宛に送りつけるという信じられない無礼な対応をおこなってきた。

これにたいして、日本人会会長名で再度ピンテル会長自身が回答するよう求め、六月二五日に送付した。

現在の状況

コーシャ議員は、国会内の「ハンガリー・日本議員友好連盟」の全会派二名の議員に番組中止の署名を求め、全会派から一七名の賛同署名を得た（外遊中などの理由で、全員の署名を集めることができなかった）。コーシャ議員は、この結果を *Ország* ハイドウ委員長に伝え、国会の意思を尊重して、TV2に問題の重要性を認識させ

るよう依頼した。ハイドゥー委員長は、ピンテル会長にその旨伝え、ピンテル会長は番組の廃棄を約束したと伝えられる（六月一八日）。

これとは別に、ORFは日本人会他から提出された番組中止要請にもとづき、番組の審査をおこなっており、その結果が近日中に公表される予定である。

問題の所在

TV2が主張しているように、同種の番組がヨーロッパの各国で放映されていることは事実である。イギリスではカザフ人が拙い英語で相手を困らせる「ドッキリ番組」が制作されており、ドイツでは「トルコ人」がその役を果たしている。

このように、西欧では言葉が堪能でないアジア系民族を「笑いの種」にする番組が放映されている。同じヨーロッパ人を「笑いの種」にすれば民族摩擦が起こるので、「差し障りのない」

遠方のアジア人が使われる。明らかに、これはアジアとアジア民族への偏見と優越感にもとづくものである。

TV2が直接番組のライセンスを購入したオランダの「オリジナル」番組は、「Ushi Hiroasaki」と称する女性レポーターが主役の番組である。

UshiはSushiから、Hiroasakiは広島と長崎を合体したものである。明らかに、この命名には悪意が感じられるが、番組そのものは、TV2の番組とはかなり異なる。オランダのレポーター嫌は背が高く、流暢な英語ときわどい会話で相手に突っ込みをおこなう知的な役割を担っており、ハンガリー語ができなくて、知的障害を想起させるTV2の設定とは完全に異なる。

TV2が真似たのは、レポーターのオカッパと黒縁メガネの変装部分だけで、「出っ歯」と知的障害の設定は、ハンガリーで編み出されたものである。その意味で、TV2は番組を改悪しているといえる。

民族差別が底流に

アジア系民族、とくに中国系住民への差別や偏見は、中東欧一帯で観察できる。それは学校でも一般社会でも同じである。このような中国人差別からは間違っている。中国人も日本人も朝鮮人も、西欧から見れば区別はない。ブダペストの通りを歩いていて、ハンガリー人から「ニイハオ」と声をかけられることは珍しくない。弱者が弱者をいじめるといふ典型的な行動様式が、中東欧で見られるのである。

ハンガリーではユダヤ人差別も底流に残存している。番組「ミツコ」をめぐる当地のインターネット・チャットを見ると、シユタール・ユーディットへの民族的差別を強調するような書き込みが多数見られる。若者の間にも、そのような差別感情が根強いことも忘れてはならない。別の差別を助長することが我々の目的ではない。

Magyarországi Japánok Szervezetének tiltakozása a TV2-n sugárzott „Micukó” műsor miatt

Budapest, 2003. május 19

A budapesti Japán Nagykövetség a TV2 által márciustól sugárzott „Micukó – A világ ferde szemmel” című műsorával kapcsolatban megfelelő intézkedést sürgető levelet nyújtott be a TV2-höz, a japán nők méltóságának megsértés miatt, azért mert úgy ítélte meg, hogy a műsor alkalmas a japán néppel szembeni előítéletek kialakítására és erősítésére, súlyosabb esetben diszkriminációt idézhet elő. A követség erre a határozott kérésre a TV2 részéről nem kapott elfogadható választ, és a műsor jelenleg is adásban van.

Ezért a mai napon a Magyarországi Japánok Szervezetének tagjai tiltakozásunkat kívánjuk kifejeznie TV2 vezérigazgatójának, továbbá kérjük a műsor azonnali felfüggesztését, és úgy határoztunk, hogy igényeljük az ORTT illetve az Interparlamentáris Unió segítségét abban, hogy segítsen bennünket abban, hogy elérjük a műsor sugárzásának felfüggesztését.

Mivel a műsor folytatását illetően egyrésztől a nézők is döntenek, kérjük a józan magyar nézők és a tömegkommunikációs szakemberek megértését és tiltakozásunk támogatását.

A tiltakozás oka

Félő, hogy a műsor az alábbi okok miatt a japán nők méltóságát nemcsak sérti, hanem a magyar nézőkben a japánokkal szemben előítéleteket alakít ki, illetve erősít meg, amely a legsúlyosabb esetben faji megkülönböztetéshez vezethet, és országaink közötti kapcsolat megromlását is okozhatja.

- (1) Maga a műsor címe is tartalmaz Japánt is magába foglaló ázsiai népek testi jellemzőjére utaló diszkriminatív kifejezést.
- (2) A Stahl Judit által alakított „japán riporternő” az egyes japán egyénekre jellemző testi jellegzetességeket, szélsőségesen eltúlzott csúf külsőt jelenít meg, és ehhez a túlzásba vitt ízléstelen vihogást használva, gyakran ismételtgetett gesztusokkal az átlagos nézőben téves benyomást kelt a japán nőkről. Erre a műsorban szereplő Máté Krisztina így emlékszik vissza: „A találkozóra egy budai hotelben került sor. Egy tévé stáb és japán asszisztense társaságában megjelent Micukó, hosszú túlnőtt Kleopátra-frizurája volt, előreálló fogai, fekete szemüvege és fehér selyemszonnyája mint egy tipikus japán nőnek.”
- (3) A „japán riporternő” értelmetlenül és különösen rosszul beszél magyarul, és ezzel azt a képet alakítja ki, hogy a japán nőknek ennyire gondot okoz az idegennyelvek elsajátítása.
- (4) A „japán riporternő” által feltett kérdések nagy része gyermeket, különösen abszurd, mintha a műsor a kérdések tartalmával azt akarná kifejezni, hogy általában a japán nők értelmi színvonala alacsony. Ezzel kapcsolatban a műsor végén az egyik vendég így nyilatkozott: „gyanakodtam, hogy a japánok nem ennyire értelmi fogyatékosak.”

További magyarázat

A TV2 továbbra is kitarat emellett a véleménye mellett, hogy a műsor a komikus műsorokban látható sajtóságos humor képviseli és nem a japánok kigúnyolása a cél. Van a japánok körében olyan vélemény is, hogy az a műsor csak egy viccműsor, és a józan ésszel megáldott magyar nézőközönség nem veszi mindezt komolyan. Voltak olyan vélemények is, hogy egy ilyen szintű műsor miatt nem kell tiltakozni. Azonban szervezetünk az alábbi pontokban foglaltaknak szeretne hangot adni.

- (1) Mivel meglátásunk szerint a műsor vezérfonala az interjú, és a riportер külseje, beszéde, viselkedése képezi a problémát, arra a következtetésre jutottunk, hogy az egész műsor kigúnyolja a japánokat. Illetve elmondható, hogy mivel az igazi humor tényleg tartalmaz bölcsességet, valamilyen tanulságot, kénytelenek vagyunk kijelenteni, hogy a műsor a bölcs humortól igen csak távol áll.
- (2) A hamis japán imázs többszöri sugárzása a televízió keresztül az adott ország nézőiben téves képet ültet el Japánról, a japánokról, amely alkalmas az előítélet elültetésére és erősítésére sőt, legrosszabb esetben faji megkülönböztetéshez is vezethet. Miközben, Magyarországon is előfordulnak japánok, illetve ázsiaiak ellen irányuló testi sértési esetek, a TV2 Micukó műsorának hosszú távú sugárzása csak erősíti a japánokkal szembeni előítéletet, ezzel veszélyeztetve a Magyarországon élő japánok mindennapi életét. Úgy gondoljuk, hogy az EU kisebbségvédelmi alapelve bizonyos értelemben ellentétes a TV2 által sugárzott műsorral.
- (3) Tudvalevő hogy, ezidáig Japán és Magyarország között kormány szinten illetve polgári szinten sok-sok ember fáradtság munkája által kulturális, gazdasági és baráti kapcsolat alakult ki. Ezt szimbolizálja, hogy 2000. áprilisában Göncz Árpád volt Köztársasági Elnök hivatalosan ellátogatott Japánba, és még friss emlékezetünkben, hogy a japán Császári Pár 2002. júniusában Magyarországra látogatott. Azonban úgy gondoljuk, hogy az ilyen, a japán nőkről hamis képet kialakító műsorok megromthatják az országok között eddig kiépített baráti kapcsolatokat.
- (4) Félő, hogy a műsor a japán nyelvet oktató intézményeköl, az azokban tanuló diákokról és az ott dolgozó tanárokról rossz benyomást kelt.

TV2の番組「Micukó」にたいするハンガリー日本人会の声明

2003年5月19日

在ハンガリー日本国大使館はTV2が3月初旬より開始した放映番組“Micuko – A vilag ferde szemmel”について、この番組がハンガリー社会において日本や日本人に対し誤ったイメージを与えると共に、日本・ハンガリーの2国間関係に多大な悪影響を与える恐れがあると判断し善処方を申し入れましたが、TV2は充分なる誠実な対応を行わず、依然放映を続けております。

そこで我々ハンガリー日本人会は、ここにTV2社長に対し抗議の意思表示をし、即時放映を中止するよう求めると共に、ORTT並びに国際議員連盟に対し、即時放映の中止が可能となるような然るべき対応をお願いすることにしました次第です。

他方、当該番組が継続されるかどうかは一般視聴者が決定する要素を持っておりますので、良識あるハンガリーの視聴者、マスコミの方々にも我々の抗議に是非ご理解とご賛同を得たいと考えます。

理由

当該番組は下記理由により、日本人女性の名誉を傷つけるに留まらず、ハンガリー視聴者に対し、日本人に対する偏見を植付け、助長し最悪の場合には民族差別に繋がり両国の関係悪化のもとになる恐れがあると憂慮したものです。

- 1) 題名そのものが、日本を含むアジア民族への身体的な特徴に対する差別表現を含んでいること。
- 2) シュタル・ユーディットが演ずる「日本人インタビュアー」は、一部日本人の身体的特徴をことさらに誇張した醜い容姿に作り、且殊更に誇張した下品な含み笑いを頻繁に繰り返す仕草を演じさせ、一般聴衆に日本人女性に対する誤った印象を生出すこと。事実、当該番組のゲストとしてインタビューを受けた Maté Krisztina は、次のような感想を語っています：
 - 「ブダのあるホテルでインタビューが行われた。テレビ・クルーとアシスタントと一緒にミツコが現れた。長いクレオパトラのような髪型で、出っ歯で、黒いメガネと白い絹のスカートをもった典型的な日本人女性だった」
- 3) 「日本人インタビュアー」が、意味不明瞭で大変たどたどしいハンガリー語を話すことにより、日本人女性が、一般的に外国語習得がこれほど不得手だという印象を与えていること。
- 4) 「日本人インタビュアー」が発する質問は、殆どが幼稚なもので、時には非常識なものであり、あたかも日本人女性が、一般的に非常に知能水準が低いのではないかと思わせる内容になっていること。
 - この点についても、一人のゲストが番組の終わりに、「日本人はこれほど知能が低いはずはないと、不思議に思っていた」と吐露している程です。

背景説明

TV2はこの番組が娯楽番組特有のユーモアであり日本人を嘲笑する目的ではないと主張しています。また日本人社会の中にも、当該番組は所詮お笑い番組であり良識あるハンガリーの視聴者ならばまともに見ないであろう、或いはその程度の番組にまじめに批判すること自体がばかばかしいとの意見もありました。しかしながら、当会としては更に以下の点を指摘したいと思います：

- 1) 実際に番組を見たところインタビューが主体の番組でその主インタビュアーの姿、言動の殆どが問題である為、番組全体として日本人を嘲笑することになっていると言わざるを得ません。また、本当のユーモアには何らかの知性が含まれているものと考えますが、当該番組は知的なユーモアとはかけ離れたものです。
- 2) 誤った日本人のイメージがテレビ放送で繰り返し放映されることは、当国の視聴者に対し日本・日本人に対する誤ったイメージを形成し、偏見を植付け、助長するものと考えます。最悪の場合には差別を喚起する恐れもなしとしません。他方、当国においても極く一部の人によるものでしょうが、日本人を含むアジア系住民への暴力行為が現在もなお続いている中で、TV2が当該番組の放映を続行することは、日本人等に対する偏見を助長し当地に在住する日本人等の生活を脅かす心配もあります。これはある意味では少数民族の保護を取り決めたEUの基本理念にも反するものと考えます。
- 3) これまで、日本とハンガリーとの間には、政府レベル、民間レベルで多くの方々の長年に亘る努力により、文化的かつ経済的に非常に友好的な関係が築かれていることは皆様ご存知の通りです。その象徴的な出来事が2000年4月にグンツ前大統領が国賓として日本をご訪問されたことと、2002年7月に日本の天皇皇后両陛下が国賓としてハンガリーをご訪問されたことであることは、記憶に新しいと思います。しかしながら当該番組のように日本人女性に対して誤ったイメージを醸成する番組は、これまで築かれてきた両国間の友好関係に水を差し、これを壊しかねない恐れがあるものと考えざるを得ません。
- 4) 当該番組は、ハンガリーで日本語を教授する学校、およびそこで日本語学ぶ生徒・学生に対して、悪い印象を与える心配もあると考えます。

Pintér Dezső
TV2
Elnök-vezérigazgató

Tisztelt Pintér Dezső Úr!

A Magyarországon élő japánokat képviselve az Önök által sugárzott „Micukó – A világ ferde szemmel” című műsorral kapcsolatban határozott tiltakozásunkat fejezzük ki. Kérjük a műsor sugárzásának azonnali felfüggesztését, elvárjuk, hogy az itt élő japán közösségtől megfelelő formában bocsánatot kérjenek, és nyilvánítsák ki a TV2 felelősségét (a műsor gyártásvezetőjének felelősségét is beleértve). Válaszukat írásban 2003. május 23-ig várjuk.

Kénytelenek vagyunk kijelenteni, hogy műsorukban olyan megformálásokat és jeleneteket találtunk, mely alkalmas a japán néppel szembeni diszkrimináció kialakítására és erősítésére, legsúlyosabb esetben faji megkülönböztetés szítására is. Kiemelten megnevezzük a következőket:

1. A címben látható kifejezés, „A világ ferde szemmel” egy a japánok illetve ázsiaiak iránt használt diszkriminatív kifejezés.
2. A Stahl Judit által alakított japán riporternő egyes japán személyekre jellemző külső jegyeket, elcsúfítva jeleníti meg, emellett ízléstelen gesztusokat gyakran ismételtet. Ezzel azt sugallja, hogy a japán nők általában véve csúnyák és alpáriak.
3. A japán riporternő magyar nyelvi szintjének szélsőséges lealacsonyítása azt a benyomást kelti, hogy a japánok általánosan gyengék az idegen nyelvek elsajátításában.
4. A megjátszott japán riporternő kérdései különösen gyermetegek, illetve abszurdok, melyek azt a képet alakítják ki a nézőben, hogy a japán nők általában nem műveltek.

A műsor központi szereplője a kitalált Takahashi Micukó japán riporternő, akinek csúf és ízléstelen szerepmegformálása még egy komikus műsorban is méltóságot sértő és ezért elfogadhatatlan számunkra.

Nem hagyhatjuk figyelmen kívül azt sem, hogy a Magyarországon japánok illetve ázsiaiak ellen irányuló testi sértéssel járó támadások is.

Ilyen társadalmi helyzetben a japán (ill. ázsiai) emberek külsejét, gesztusait csúfosan felnagyítani, majd ezt a vicc eszközöként hosszútávon felhasználni veszélyes, az előítéletek kialakítását, erősítését szolgálja, és ezzel faji megkülönböztetést is eredményezhet. Félő, hogy amennyiben bekövetkezik ez a helyzet, ez az itt élő japánok mindennapjanak nyugalmát megzavaró tényezővé válhat.

Mindamellet Micukó műsoruk sugárzása szemben áll a rasszizmus felszámolásán fáradozó Európai Unió elképzeléssel. Úgy érezzük, hogy ezzel megkérdőjeleztetik az Önök által vállalt és képviselt médiaszellemet is.

Reméljük, hogy levelünkkel és nézőpontunk kifejtésével segítjük helyzetértékelésüket és egyetértenek határozott tiltakozásunkkal. Biztosak vagyunk abban, hogy át tudják érezni a helyzet súlyosságát és megértik azt, hogy sürgős intézkedésükre és válaszukra számítunk. Nem szeretnénk azt hinni, hogy a műsor tovább sugárzása Önöknek megéri a magyar-japán kapcsolatok kockára tételét.

Budapest, 2003. május ' 16'

Tisztelettel,

Ito Kazuya
Elnök
Magyarországi Japánok Szervezete

TV2
ピンテル会長殿

貴社放映番組“Micuko – A vilag ferde szemmel”につき、ハンガリー在住の日本人を代表し、ここに抗議の意思を表し、番組放映の即時の中止、日本人社会への謝罪、TV2としての責任（番組制作担当者の責任を含め）の明確化を要求するので、2003年5月23日までに書面で回答を戴きたい。

以下の諸点において、この番組は民族的偏見を植付け・助長し更には民族差別を生出す恐れが大である番組だと断定せざるを得ない。

1. 表題“ A vilag ferde szemmel”という表現そのものが、日本人あるいはアジア人への差別的な表現であること。
2. シュタル・ユードットが演じる「日本人インタビュー」は、一部の日本人の身体的特徴を極端に誇張して外見の容貌を醜く作り、且つ、一部の動作を徒に誇張して大変下品な仕種を頻繁に繰り返すことにより、日本人女性があたかも一般に醜く下品であるという印象を強く与えていること。
3. 「日本人インタビュー」のハンガリー語能力を極端に低めることで、日本人女性が一般に語学力に貧しいという印象を与えていること。
4. 「日本人インタビュー」の質問内容の殆どが極めて幼稚であり、時には非常識であり、日本人女性には一般に知性がないという印象を強く与えていること。

当該番組は、インタビュー高橋 Micuko が中心の番組でそのインタビューの日本人女性を極端に下品で醜く誇張して演技させることは、如何に娯楽番組とはいえ 名誉毀損と言える程容認し難いものである。

ハンガリーにおいても、日本人・アジア系住民に対しごく一部の人たちによる暴行事件が起きていることは無視できない現実である。そのような社会環境の中で、ことさら日本人(アジア人)の容姿と仕草を醜く誇張し、それを笑いの道具として使い続けることは、偏見を植付け・助長し更には民族差別を生み出し兼ねない。民族差別が起きた場合は 在留者の日常生活の安全をすら脅かす心配がある。

それはまた、当該番組の放映は 民族差別から脱却しようという EU 加盟の理念とも反するものであると考えるし それ以前に、貴社が本来持つメディア精神にもとるものであらうと思料するが如何か。

ついでに、速やかに我々の要求に対する回答を戴きたい。我々の要求が満たされない場合には、更に必要な追加的措置をも考慮せざるを得ないと思える。

日本人会会長
伊藤 和也

ORTT

ハイドゥー委員長殿

TV2 が 3 月初旬より開始した放映番組 “ Micuko – A vilag ferde szemmel”につぎ、この番組がハンガリー社会において日本や日本人に対し誤ったイメージを与えると共に、ハンガリーに在住する日本人の平素の生活、経済・文化活動に支障を来す恐れのみならず、現在まで 多数の人が培ってきた日本・ハンガリー 2 国間の良好な友好関係を脅かす種とすらなると考えます。在ハンガリー日本国大使館も 即時放映中止を含む善処方を申入れましたが、TV 2 は充分誠実には対応せずに 依然放映を続けております。

そこで 我々はハンガリー在住の日本人を代表し 2003 年 5 月 16 日付けで TV 2 社長あて抗議の意思を表明し、番組の即時中止を求めるとともに 番組の即時中止が可能となる然るべき対応がなされるよう ORTT に同番組の適格審査を至急お願いすることと致しました。何卒 宜しくご賢察のほどお願い申し上げます。

我々はとりわけ以下の諸点において、この番組が日本民族への偏見を植付け、助長すると共に 最悪差別を醸成しかねない番組だと判断致しました。

- 1 . 表題 “ A vilag ferde szemmel”という表現そのものが、日本人更にはアジア系人種への差別的な表現であること。
- 2 . シュタルル・ユードゥットが演じる「日本人インタビュー」は、一部の日本人の身体的特徴を極端に誇張した醜い容貌にし 且つ 下品な仕草を頻繁に繰返すことで、あたかも日本人女性が一般に醜く下品であるという印象を与えていること。
- 3 . 「日本人インタビュー」のハンガリー語能力を極端に低くめることで、日本人が一般に語学力に貧しいという印象を与えていること。
- 4 . 「日本人インタビュー」の質問内容は殆どが極めて幼稚なもので 且つ、非常識なものであり日本人一般に知性がないという印象を与えていること。

当該番組の このような「日本人インタビュー」の設定・起用は番組への視聴者の注目を惹こうとする為の手法でしょうが、その手法・内容において、日本人への偏見を植付け・助長し、最悪差別意識の涵養にまで発展しかねない容認し難い内容と判断します。それはまた、民族差別から脱却しようとする EU の基本理念とも反するものと考えます。

また、かような番組を継続放映することは 日本人の名誉を毀損するだけでなく、ハンガリー人社会に日本人に対する差別意識が醸成される恐れが大で その場合は在留日本人の日常生活の安全を脅すものとなると考えます。

以上の理由で、当該番組は テレビ放映という公共的なサービスにふさわしくない内容と考えます。

尚、TV 2 社長宛ての抗議文と国際議員連盟ハンガリー・日本部会委員長宛て要請書のコピーを 貴殿ご参考まで添付致します。

日本人会会長

伊藤 和也

Kósa Ferenc
Interparlamentáris Unió
Magyar Japán Tagozatának Elnöke

Tisztelt Kósa Ferenc Úr!

A TV2 márciustól sugározza a „Micukó – A világ ferde szemmel” című műsort. Ezzel kapcsolatban jelezni kívánjuk, hogy ez a műsor a magyar társadalomban téves képet alakít ki Japánról és a japán emberekről. A műsor nemcsak a Magyarországon csendes életvitelt folytató japánok gazdasági és kulturális tevékenységében okozhat kárt, hanem az eddig fáradságos munkával sokak által kialakított és ápolta, országaink közötti jó baráti kapcsolatot is fenyegetheti. A budapesti Japán Nagykövetség benyújtotta tiltakozó levelét a TV2-höz, de követségünk nem kapott elfogadható magyarázatot a TV2-től, és a műsor jelenleg is adásban van.

Ezért 2003 május 15 dátummal, a Magyarországon élő japánok képviselőjében tiltakozó levelet juttattunk el a TV2 vezérigazgatójához, melyben kérjük a műsor azonnali felfüggesztését. Ezzel egyidejűleg levelet küldtünk az ORTT-nek is, hogy a műsorral kapcsolatos kifogásainkat vizsgálja ki és kérjük, hogy intézkedjenek.

Jelen levelünkkel kérjük az Ön és képviselőtársai maximális megértését, álláspontunk és az ügy komolyságát illetően. Kérjük, hogy segítsenek bennünket abban, hogy elérjük a műsor sugárzásának felfüggesztését az illetékes hatóságok segítségével. Előre is köszönjük támogatásukat és pozitív hozzáállásukat.

A műsor a japán néppel szembeni előítélet kialakítására és erősítésére alkalmas, súlyosabb esetben diszkriminációt okozó részét a következők:

1. A címben látható kifejezés, „A világ ferde szemmel” egy a japánok illetve ázsiaiak iránt használt diszkriminatív kifejezés.
2. A Stahl Judit által alakított japán riporternő egyes japán személyekre jellemző külső jegyeket, elcsúfítva jelenít meg, emellett izléstelen gesztusokat gyakran ismételt. Ezzel azt sugallja, hogy a japán nők általában véve csúnyák és alpáriak.
3. A japán riporternő magyar nyelvi szintjének szélsőséges lealacsonyítása azt a benyomást kelti, hogy a japánok általánosan gyengék az idegennyelvek elsajátításában.
4. A megjátszott japán riporternő kérdései különösen gyermekeg, illetve abszurdok, melyek azt a képet alakítják ki a nézőben, hogy a japán nők általában nem műveltek.

A Micukó műsor a japánokkal szembeni előítéleteket felnagyítja, majd ezt komikusan bemutató próbálja feltehetőleg a nézőket a képernyő elé vonzani, de ennek módszere, illetve tartalma a japánokkal szembeni előítélet kialakítását illetve a meglévő előítélet növelését erősíti, mely a legrosszabb esetben a faji megkülönböztetés kialakulásához is vezethet, amit megengedhetetlennek tartunk. Véleményünk szerint mindez szemben áll az a rasszizmus felszámolásán fáradozó Európai Unió alapelveivel és az ez irányú magyar törekvésekkel.

Szeretnénk annak a véleményünknek is hangot adni, hogy az ehhez hasonló műsorok hosszú távú sugárzása egy idő után a japánoknak nem csak méltóságán ejt csorbát, hanem félt, hogy a magyar társadalomban diszkriminációt gerjeszt a japánokkal szemben. Ha ez bekövetkezik, akkor a Magyarországon élő japánok mindennapjainak nyugalmát megzavaró tényezővé válhat.

A felsoroltak miatt úgy ítéljük meg, hogy ez a műsor méltatlan nyilvánosság előtti sugárzásra.

Szíves tájékoztatására csatoltan mellékeljük a TV2 igazgatójának és az ORTT-hez írt kérelmünket is.

Budapest, 2003. május '16'

Tisztelettel,

Ito Kazuya
Elnök
Magyarországi Japánok Szervezete

国際議員連盟ハンガリー-日本部会
コーシャ委員長殿

TV2 が 3 月初旬より開始した放映番組 “ Micuko – A vilag ferde szemmel”につき、この番組がハンガリー社会において日本や日本人に対し誤ったイメージを与えると共に、ハンガリーに在住する日本人の平素の生活、経済・文化活動に支障を来す恐れのみならず、現在まで多数の人が培ってきた日本・ハンガリー 2 国間の良好な友好関係を脅かす種とすらなると考えます。在ハンガリー日本国大使館も即時放映中止を含む善処方を申入れましたが、TV2 は充分誠実には対応せずに依然放映を続けております。

そこで我々はハンガリー在住の日本人を代表し、2003 年 5 月 16 日付けで TV2 社長宛て抗議の意思を表明し、番組の即時中止を求めることと致しました。同時に ORTT 委員長宛てに、当該番組の適格審査を要請致しました。

つきましては、貴殿ならびに貴部会の議員には、我々の抗議の趣旨と事態の重大さをご理解戴き 管轄官庁が番組の即時中止が可能となる然るべきご対応して下さいようご助力をお願いする次第です。何卒宜しくご賢察のほどお願い申し上げます。

我々は下記の諸点において、この番組が日本民族への偏見を植付け・助成し、最悪の場合は民族差別を醸成する恐れがある番組であると判断致しました。

- 1 . 表題 “ A vilag ferde szemmel”という表現そのものが、日本人あるいはアジア人への差別的な表現であること。
- 2 . シュタール・ユーディットが演じる「日本人インタビュー」は、一部の日本人の身体的特徴を極端に醜い容貌にし且つ下品な仕種を頻繁に繰返すことで、あたかも日本人女性が一般に醜く下品だという印象を与えていること。
- 3 . 本人インタビュー」のハンガリー語能力を極端に低くめることで、日本人は一般に語学力に貧しいという印象を与えていること。
- 4 . 「日本人インタビュー」の質問内容は殆どが極めて幼稚であり、且つ非常識なものであり、日本人には一般に知性がないという印象を与えていること。

当該番組は日本人にたいする偏見を誇張し、かつこれをコミカルに描くことで、番組への視聴者の注目を惹こうとするものと思いますが、その手法においても、また内容においても、日本人への偏見を植付け・助成し最悪の場合 差別意識の醸成にまで発展しかねない容認し難いものと判断します。それはまた、民族差別から脱却しようというEUの基本理念とも反するものと考えます。

また、かような番組を継続放映することは日本人の名誉を毀損するだけでなく、ハンガリー人社会に日本人に対する差別意識が醸成される恐が大であり その場合は在留日本人の日常生活の安全をも脅かすものと考えます。

以上の理由で、当該番組はテレビ放映という公共的なサービスにふさわしくない内容と考えます。

尚、TV2 社長宛て抗議書とORTT宛て要請書をご参考まで添付致します。

日本人会会長
伊藤 和也

Pintér Dezső
TV2
Elnök-vezérigazgató

Tisztelt Pintér Dezső Úr!

Az Önök által sugárzott „Micukó – A világ ferde szemmel” című műsorral kapcsolatban május 16-án benyújtott levelünkre június 2-án érkezett válasz Poich programigazgató úrtól.

Meglepetéssel észleltük, hogy levelük a Budapesti Japán Nagykövetség munkatársának, Abe úrnak címzett levél másolata.

A Magyarországi Japánok Szervezete nem a Budapesti Japán Nagykövetség alegysége, hanem a Magyarországon működő japán vállalatok munkatársaiból, a nagykövetségre kiküldöttekből, különböző szervezetek megbízottaiból, valamint családtagjaikból, ösztöndíjas tanulókból, Magyarországon letelepedett japánokból, illetve azok magyar családtagjaiból álló önálló szervezet. Tagjaink száma közel 500 fő, amely a legnagyobb, japánokat tömörítő szervezet Magyarországon, egyben a japánok által szervezett magyarországi rendezvények többségét létrehozó anyaszervezet. A szervezet a kiadásait tagdíjakból, a Budapesten működő 40 japán vállalat adományaiból fedezi, így a japán kormánytól minden tekintetben elkülönülő privát szervezet.

Önálló szervezetünk képviselőjeként írt levelemre Ön a Nagykövetségnek címzett levél másolatát küldte el, ezzel megsértve szervezetünket, és ennek kapcsán kénytelenek vagyunk megkérdőjelezni Önnek az üggyhez való hozzáértését. Emellett megkérdőjelezzük az Önök reakciójának tisztességességét az igényünkkel kapcsolatban.

Mi az Önök műsorát, a „Micukó”-t oly módon ítéljük meg, hogy az a magyar társadalomban növelheti a japánokkal szembeni előítéletet, és ezt a társadalmi hatást kívánjuk megszüntetni a műsor azonnali leállítással. Egyidejűleg kértük a műsor gyártásával kapcsolatos felelősség tisztázását is. Az igényeink nem egyeznek meg a Nagykövetség kéréseivel.

Az Önnel készült, nyomtatott sajtóban megjelent interjúkból értesültünk, hogy a szóban forgó műsor sugárzása júniustól augusztusig szünetel, majd ősztől más formában folytatódik. Azonban ha a műsor címét, a „Micukó”-t, a „vállig érő bubifrizurát” és egyéb külső jegyeket megtartják, a Magyarországi Japánok Szervezete ismételten igényelni fogja a műsor azonnali leállítását.

Érzékelhető, hogy a már kialakított „Micukó” imázs az itt élő japán hölgyekre negatív fényt vet, és az itt élő japán kolóniára kedvezőtlen hatással van, ezért nem nézhetjük tétlenül, hogy ez az imázs a jövőben is erősödjön.

Képzelve el, hogy az Ön gyermekeit vagy munkatársaikat „Micukó” néven csúfolnák az iskolában, és kiközösítenék.

Próbáljon a támadások célpontjában álló emberekre gondolni, és gondolja át a műsoruknak a társadalomra gyakorolt hatását.

A műsorgyártás célja és a társadalomra gyakorolt hatás két különálló dolog.

Hisszük, hogy mindennemű média köteles felelősséget vállalni műsorainak a társadalomra gyakorolt hatásáért. Biztosak vagyunk benne, hogy ebben Ön is egyetért velünk.

Ezennel szervezetünk újból igényli a műsor örök leállítását, illetve azt, hogy a „Micukó” imázs ne ültetődjön el a magyar társadalomban.

Ezzel együtt kérjük a felelősség tisztázását, és a hasonló esetek megelőzését.

2003. július 02-ig kérjük az Ön személyesen írt válaszát.

Budapest, 2003. június ' 25'

Tisztelettel:
Ito Kazuya
Elnök
Magyarországi Japánok Szervezete

TV2 社
会長 ピンテル・デジュー殿

貴社の番組「Micuko – A vilag ferde szemmel」に関する 5 月 16 日付けの小生出状に対し、6 月 2 日付けにてポイチ番組部長から返答をいただきました。しかしながら その返答は、貴殿が日本大使館阿部書記官に送付された手紙のコピーを添付しただけのものです。

ハンガリー日本人会は日本大使館の下部組織ではなく、ハンガリーに在住する日系企業社員、大使館職員、各種事業従事者など、及びその家族、留学生、当地に永住する日本人およびそのハンガリー人家族を会員とする独立組織です。会員数約 500 名のハンガリーでは最大規模の日本人組織で、当地における日本人が主催するほとんどの行事を組織する母体です。この組織の運営は、会員の会費と、ブダペスト日本商工会約 40 社からの寄付金からなっており、日本政府とは財政的に完全に独立した民間組織です。

このような性格の私達の組織を代表して出した小生の手紙に対して、貴殿が大使館宛に回答された手紙のコピーを送付することで我が組織への返答とされたことは、大変失礼なことであり、その見識を疑わざるを得ません。また、私たちの要求に対する 貴社の対応の誠実さを疑うものです。

私達は貴番組「ミツコ」が、学校や一般社会における日本人への偏見やいやがらせを助長する可能性があるものとみなし、その社会的影響を除去すべく、即時の番組停止を求めました。併せて、このような番組が制作されたことについて、その責任の所在を明確にすべきことを求めました。このような要求は大使館の要請とは異なるものです。

貴殿の新聞インタビュー記事から知る限り、当該番組は 6 月～8 月の期間は放映休止とされ、秋からは別の形で再開されるとあります。しかし、「ミツコ」という名称と、「おかつぱ型の髪型」等の容姿が引き継がれ、「ミツコ」のイメージが残る限り、日本人会は番組の即時停止を求め続けます。

すでに形成された「ミツコ」イメージが日本人女性にたいする負のイメージを形成し、当地に在住する日本人社会に悪影響を及ぼしているにもかかわらず、そのイメージが垂れ流される続けることを容認することはできません。貴殿あるいは貴社のスタッフの子女が学校で「ミツコ」と名付けら、イジメを受けることを考えてみてください。被害を受ける者の立場に立って、当該番組の社会的影響を考えて下さい。

番組制作の意図と、その社会的影響はまったく別のものです。番組の社会的影響について、すべてのメディアは責任を持つべきであり そうしていると考えます。この点は、貴殿も同意されるものと思います。

ハンガリー日本人会は、貴殿にたいし、再度、番組の永久廃棄を要求し、「ミツコ」のイメージがハンガリー社会に蔓延しない措置を講じることを要求します。

併せて、今般の問題の責任の所在を明確にし、同種の事件の再発を防ぐことを要求します。

2003 年 7 月 2 日までに 貴殿ご自身から弊状に対する回答をお願い致します。

2003 年 6 月 25 日

日本人会会長
伊藤 和也

【会社紹介】

Maxell Hungary Kft.

高畑 光博

今年の4月から営業を開始いたしました Maxell です。事務所は、ブダペスト 11 区の Infopark 内に所在しております。ここはブダペスト工科大学に隣接する IT 関連企業などが集まったビジネスパークになっております。現在 Maxell Hungary の従業員は 7 名（日本人：1、ハンガリー人：6）ですが、平均年齢は 30 歳と若いスタッフで構成しております。当社はハンガリーのみならず、その他の中東欧も管轄しており、今後の売上拡大に応じ人員の増強を計画しております。

さて「Maxell」の社名ですが、1961 年創業時の主力製品であった乾電池のブランド名「Maximum Capacity Dry Cell（最高の性能を持った乾電池）」に由来します。海外では「Maxell は欧米系の会社ですか」と尋ねられたり、Maxwell（米国で有名なコーヒーのブランド？）と間違えられることもあります。日本での社名は日立マクセル株式会社で日立グループに属しております。ハンガリーでは、更に Maxell ブランドの知名度を拡大させるためネオンサイン（ドナウ河 Petőfi 橋のほり）を設置し、またブダペスト市内トラムの車両を媒体とした広告を行い、最近では 6 月 7 日にブダペストで開催された Euro2004（欧州サッカー選手権）の予選で、ハンガリー対ラトビア戦のスポンサーを行いました。

この Maxell ブランドは、アルカリ乾電池、音楽専用カセットテープ、国産初のフロッピーディスクを経て現在では DVD ディスクなどへ受け継がれております。ここハンガリーでも、Maxell のオーディオテープ、ビデオテープ、あるいはフロッピーディスクといった商品を見かけられたことがあるかと思いますが、今日の主力商品は企業向け超高容量のコンピューターテープや放送局向けのビデオテープとなっております。特にコンピューターテープでは、記憶容量が 400GB（ギガバイト）と非常に大きいものもあり（写真下）、このテープの容量は実にフロッピーディスクの約 28 万枚分に相当します。従って、日々膨大なデータを処理する銀行や鉄道・航空会社、また METRO や TESCO といった大型スーパー（経理部門）などのお客様からご用命をいただいております。この分野での Maxell の世界シェアは現在 60% を超えております。ハンガリーでは、まだ大きな需要はありませんが、今後は情報技術（IT）の飛躍的な進歩にともない確実に増えていくものと期待しております。

一方、放送局向けの業務用テープについても欧州 260 局の皆様にご愛用いただき、より高い信頼性と品質を供給しつづけており、その他 Maxell 磁気テープの技術を生かした製品として、クレジットカードや銀行通帳用の磁気ストライプ、鉄道の自動改札用切符や定期券（どちらも裏面が磁気テープ状になっている）などもあります。

今回は、磁気テープ商品の中から一部を簡単に紹介させていただきましたが、これまで培った「技術と信頼」を大切にしながら、これからも時代のニーズを先取りした製品をハンガリー国内はもとより中東欧の皆様にご供給し、社会とともに発展できるよう頑張りたいと思います。

今後とも宜しくお願いいたします。



LTO Ultrium2 データカートリッジ